

## 《 論 説 》

## 「追従者」ストラトクレス

—— ヘレニズム初期アテナイの政治情勢を巡って ——

酒 嶋 恭 平

## 【要旨】

本稿の目的は、ヘレニズム初期アテナイにおいて最も活躍した政治家の一人であるストラトクレスに焦点を当て、彼の政治的行動に新たな解釈をもたらすことにある。この目的のため、本稿はストラトクレスの行動を検討し、彼を同時代の政治家の中に位置づけて考察した。

分析の結果、ストラトクレスはかつて考えられてきたような「追従者」ではなく、彼の行動は都市の利益にもなり得るものであったこと、それと同時に、彼が行った「追従」は同時代の他の政治家に共有された行動であったことが確認された。その一方で、ストラトクレスには同時代の他の有力政治家と異なり軍事・外交面での活躍はなかった可能性が高いこと、しかし彼は、「劇的」な言語やパフォーマンスを用いて、市民を指導する政治家であったことを明らかにした。

この結論は、前 307 年以降、両王の支配の下で内政が制限された状況における民主政の重要性、または両王の支配の影響を政治実践の側面から解釈する一つの事例とすることができると考えられる。

## はじめに

後継者戦争最大の武将にして、アンティゴノス朝初代君主であるアンティゴノス・モノフタルモス（以下、アンティゴノス）は、前 301 年のイブソスにて敗死するまでに東地中海世界の大半を手中に収めた。彼がアレクサンドロス大王の築いた大帝國を再興せんばかりの勢いを有していたことは確かである。もしもイブソスで敗れなければ、彼は後継者戦争の勝者として、アレクサンドロス大王の「真の」後継者となっていたかもしれない。彼の勢力伸長を可能にした基盤として第一に挙げるべきは、小アジアに残された多数のマケドニア兵によって形成された強力な軍事力であろう<sup>1)</sup>。また、彼の息子であり、前 306 年に揃って王となったデメトリオス・ポリオルケテス（以下、デメトリオス）の存在も、アンティゴノスの勢力伸長に極めて大きな意義を持っただろう。王権を分有する軍事に秀でた息子の存在は、多方面での軍事作戦の展開を可能にただけでなく、権威の源として機能したであろう。フリュギアを中心に小アジアを拠点とできたのは、地政学的に優位に立つ要因となったとも考えられる<sup>2)</sup>。同様に、ポリスと比較的良好な関係を築きあげたことも、彼の支配において重

要であった。彼は、他の後継者たちと比べて徹底してポリスに「自由」を与える施策をとると同時に、物資を贈与したことで、ポリスの支持を取り付けたとされる。アンティゴノスは、ポリス自体を支配圏に組み込むだけでなく、その権力基盤の一つとすることに成功したと考えられている<sup>3)</sup>。

このアンティゴノスとポリスの関係は、ヘレニズム期という時代を考えるにあっては注目に値する。アンティゴノスはヘレニズム期のポリスと王権の関係を形作った一つの契機と推測できるからである<sup>4)</sup>。例えば、先にも述べたように、彼は他の後継者に先駆けて「自由」や必要な物資をポリスに与え、息子と共に恩恵を施与する王として自身を示すことに成功した。こうしたヘレニズム王たちの施策は、ローマの東地中海世界への侵入とヘレニズム諸王の衰退まで続いた<sup>5)</sup>。要するに、アンティゴノスの時には既に、ヘレニズム期におけるポリスと王権との基本構造の一つが明らかになっていたのである。しかし、1980年頃に始まるポリスの生命力を強調する研究動向にもかかわらず<sup>6)</sup>、アンティゴノスの治世をポリスの視点から捉え直そうとする研究は、さらに発展の余地のあるように思われる。そこで本稿では、ポリスの視点からアンティゴノスの支配を捉え直すため、特に彼の支配が内政にもたらした影響について、アンティゴノスの支配に組み込まれた都市の状況を考察してみたい。

本稿では、ケーススタディとしてアテナイを取り上げる。アテナイは前307年にデメトリオスによって「自由」を与えられてから、前301年にアンティゴノスがイプソスで敗れるまで、両王の支配下にあった都市である。アテナイを取り上げる理由は、後世の史料の記述ながら、両王がアテナイを重要視していた、という伝承があることにもよるが<sup>7)</sup>、最大の理由は史料が多いためである。このケーススタディは、同様にアンティゴノスの支配下に組み込まれたコリントスなどのギリシア本土の諸都市、島嶼部、あるいは、アンティゴノスの膝元にあった小アジアの諸都市に直ちに敷衍することはできない。しかし、諸都市と王との関係を考える上で、本稿の分析は一つの礎を提供することになると思われる。

以下、本論では、アテナイの状況を明らかにするために、ストラトクレスという人物の活動に焦点を当てたい。彼は、前307年にデメトリオスがアテナイに「自由」を与えてから、前301年までの間に最も活躍した当時第一級の政治家として知られる。彼に焦点を当てる理由は、彼が両王、とりわけデメトリオスの追従者として、支配の利益を最も享受した存在と伝えられるからである<sup>8)</sup>。こうした評価のためもあってか、彼に関しては十分に考察に耐えうるだけの史料が残っている。王の支配の影響を考察するという本稿の目標にとって、彼はまさに打って付けの対象であると思われる。

## 第1章：先行研究と問題の所在

### 第1節 ストラトクレスの経歴

ストラトクレスは、前4世紀末から前3世紀初頭にかけて最も活躍したディオメイア区出身の政治家である。ディオメイア区はアテナイ中心市の南東、市壁のすぐ近くに位置する小さな区である<sup>9)</sup>。

ストラトクレスは前356年頃に生まれたと考えられている<sup>10)</sup>。彼の家族については比較的细节にわかっており、父エウテュデモスは三段櫓船奉仕と合唱隊奉仕を、祖父ストラトクレスは前4世紀の前半に少なくとも6回の三段櫓船奉仕を行っている。多額の出費を伴う公共奉仕を幾度も遂行していることから、ように、ストラトクレス家はアテナイで最富裕な家族の一つであった。情婦を囲っていたことを伝える記事の存在から知られるように、ストラトクレス本人もその富を引き継いでいたらしい<sup>11)</sup>。

記録されている限り、ストラトクレスの最初の活動は、前323年に発生したいわゆる「ハルパロス事件」に参加したことである<sup>12)</sup>。アレクサンドロスの財務官であったハルパロスが、大王不在の際の浪費を咎められるのを恐れて、大王が東方遠征から帰還する前にバビロンから逃亡した。その際、多額の金をアテナイに持ち込んだのだが、それを横領した廉でデモステネスら当時第一級の政治家たちが、同じく当時の有力政治家ヒュペレイデスらによって告発されたのである<sup>13)</sup>。ストラトクレスはこの事件の際に原告の一人となって、デモステネスを相手に弁論を行っている。彼はその後も、前323年に始まるラミア戦争、また前322年から前307年まで、市民権の制限による寡頭政を外部勢力に強いられた時期も、弁論や政策立案を行う政治家として活動を継続したようである<sup>14)</sup>。しかし、ストラトクレスが最も活動したのは、前307年から前301年のあいだのことと見受けられる。この時彼は50歳前後であっただろう。この時期の初めに、アテナイに自由を与えたアンティゴノスとデメトリオスを神として崇拝する決議を提案したのを皮切りに、知られる限りで26の決議を提案しており、親アンティゴノス、デメトリオス派として、当時もっとも積極的に政治活動を行った人物として知られている<sup>15)</sup>。こうした決議のほとんどは、アンティゴノスやデメトリオスの「幕友」<sup>16)</sup>を称揚し、彼らに栄典を与えるものであった。後にも述べるが、文学的史料の記述に加え、こうした碑文史料の残存状況もあって、ストラトクレスは両王に阿ることで利益を得た人物であると認識されてきた<sup>17)</sup>。

前304年にデメトリオスがアテナイに滞在し、アテナイの内政に大きな影響力を及ぼしたこときっかけに、彼の政敵であったデモカレスやフィリッピデスたちが国外に追放された。こうした事件が起きた後も、ストラトクレスは以前と同様の活動を継続した<sup>18)</sup>。しかしイブソスの戦いにおいてアンティゴノスが敗死すると、アテナイは外部勢力の影響力を排除することを決議し、デメトリオスの入国を拒絶した。ストラトクレスはその後すぐに政界の表舞台から姿を消したらしいが、内訌やラカレスによる僭主政の設立を経験した前301年から前

295年までの期間は史料が極めて貧弱であり、彼の動向は判然としない。

彼の最後の政治活動として知られているのは、前292年にパイアニア区フィロメロスの子フィリッピデスを顕彰する決議の提案である<sup>19)</sup>。デメトリオスが再びアテナイを支配した時期であるために、デメトリオスとの関係が彼の政治活動において重要であった可能性が、この決議からも窺える。史料が不足しており彼のその後の消息は不明だが、この決議の時点で彼の年齢は65歳程度であり、その後に政界を引退していてもおかしくはないだろう<sup>20)</sup>。

## 第2節 先行研究概観

まず、先行研究におけるストラトクレスの評価を概観したい。ただ、先行研究をみていくにあたり、先にストラトクレスに関する文学的史料に関して触れておこう。彼に関しては、ヘレニズム期としては例外的に豊富に残された碑文の残存状況もさることながら、プルタルコスが豊富な情報を残している。とりわけ、『英雄伝』の一つ「デメトリオス伝」において<sup>21)</sup>、プルタルコスはストラトクレスを「下品で猥らな<sup>22)</sup>」人物と特徴づけ、彼の行動を逐一非難することで、デメトリオスに対する阿諛追従によって利益を得た自己中心的な人物として描いたのである。プルタルコスはまた、ストラトクレスの性格付けをするにあたり、彼に批判的な喜劇の断片や逸話ばかりを引用している<sup>23)</sup>。こうした史料の傾向ゆえに、以前の研究は、プルタルコスが示したストラトクレス像を額面通りに受け止めてきた。彼は自分の祖国を蔑ろにして私利私欲を追求し、両王への追従で利益を得た人物として認識されてきたのである<sup>24)</sup>。例えば、ヘレニズム期アテナイ研究の先鞭をつけたFergusonは、ストラトクレスと彼の一味の行動を「恥知らずの媚び諂い shameless cringing」とし、その政敵であるデモカレスを理想的な民主政支持者と評価する一方で、ストラトクレスをデメトリオスの「代官 the vicegerent」とした<sup>25)</sup>。他に、「下劣な卑屈 degrading subservience<sup>26)</sup>」、「おべっか使い toady<sup>27)</sup>」、「民主政のデマゴーグ」でデメトリオスの「腰巾着 Günstling」である「おべっか使い Schmeichler」<sup>28)</sup>とか、「(デメトリオスの) 尻拭い σφουγγοκολάριος」<sup>29)</sup>といったレッテルが彼に与えられてきた。『オックスフォード古典学事典』第4版でも、彼を「無節操な民衆扇動と、デメトリオスと彼の側近への過度の賞賛で名を成した」人物と説明している<sup>30)</sup>。

1980年代以降、ヘレニズム期のギリシア世界に対する評価が肯定的なものに変化したすと、ストラトクレスの人物評価に関しても新たな議論が起こされるようになった<sup>31)</sup>。Gabbertは、長らく用いられてきた民主派、寡頭派という区分を不適切と考え、ヘレニズム期アテナイは本質的に民主政であったと考えた。そして、主たる政治問題は民主政か寡頭政かという国制如何ではなく、どの政治権力が民主政の維持を許可してくれるのか、という点にあったとする。従って、ストラトクレスもまた民主派であり、アテナイが民主政であることを許可するデメトリオスの好意を得るべく行動したという<sup>32)</sup>。もっとも、Gabbertの議論はあくまで議論の枠組みを提供したに過ぎず、詳細な実証を伴うものではない。またPaschidisは、

彼はストラトクレスの活動を二段階に分け、具体的に活動を分析することでそれぞれ異なる評価を与えた。彼によればストラトクレスは前 307 から前 305 年までは都市に利益をもたらそうと王や彼の幕友に顕彰を提案した。しかし、前 303 年以降は、彼の政策に対する反発が高まるなかで、彼が両王と都市との唯一の仲介者であるという地位を維持するために、両王の手先と化したという。だが Paschidis は、最終的には、適切な指導者の存在が王と民主政ポリスとの共存を可能にするとヘレニズム王たちに示したとして、ストラトクレスの指導全体を肯定的に評価したのであった<sup>33)</sup>。総じて、彼はストラトクレスについて折衷的な評価を示したと言える。

ストラトクレスの再評価を最も推し進めたのが Bayliss である。彼は 1980 年代に始まるヘレニズム期民主政研究の発展を受けて、当該時期のアテナイ民主政を再評価しようと試みた。そこで彼は、古典期とヘレニズム初期それぞれのアテナイ民主政の類似性を示すべく、後者の特質や、政治家をより実態に即して描き出す試みを行った<sup>34)</sup>。そこで選ばれた 3 人の政治家のうち 1 人がストラトクレスである。彼は、ストラトクレスに対する低評価の原因とされてきた出来事を、アテナイ以外の史料を参照しつつ詳らかに検討し、最終的にストラトクレスを、アテナイのために尽力した政治家とした。その結果、ストラトクレスを、「追従者」から「時期を得た<sup>35)</sup>」政治家として描き直したのである。残念ながら Bayliss は Paschidis の議論を参照しておらず、両者の関係は不明だが、Bayliss は Paschidis の見解に対して批判的な立場であるとみてよからう。

このように、ストラトクレスを巡っては、彼を追従者としてではなく、実態に即して描こうとする研究が進んでいる状況にある<sup>36)</sup>。

### 第 3 節 問題の所在と本稿の課題

以上の研究動向について問題点を二つ指摘したい。第一に、既に数人の研究者が指摘しているように<sup>37)</sup>、先行研究の多くはプルタルコスの記述に影響を強く受けすぎている。従来の研究はプルタルコスの批判的な記述に依拠してきたが、新たな研究においてもその態度が維持されている。プルタルコスの記述が貴重な史料であることは確かだが、その主眼はデメトリオスの栄枯盛衰であって、ストラトクレスはその舞台道具に過ぎないように思われる。彼のその人物評価に囚われない視点が必要である。また、Ager も指摘しているが、政治家が政治に参加する際に、自身の私利私欲の追及と都市の利益の追求は一致しうるのであろう<sup>38)</sup>。

第二に、第一の論点と一部重なるが、ストラトクレスが単なる王の「追従者」か否か、という点が論点とされてきた結果、ストラトクレスとアテナイの内部との関係とが切り離されて論じられている。これでは、ストラトクレスがとった政治行動に対して十分な評価が与えられているとは言い難い上に、被支配者となった都市の状況とストラトクレスとの関係や、こうした状況下におけるストラトクレスの政治行動の意義についても、十分に理解できないのではないだろうか。また、彼の政治活動のアテナイにおける意義を明らかにすることは、

両王に対するアテナイ側の反応を解明することに繋がり、これは、アンティゴノスの王権と支配をギリシア側の視点から捉え直すことにも繋がるであろう。

そこで以下では、ストラトクレスの政治行動を、当時のアテナイの状況を踏まえて再検討する。その際、批判を踏まえて、彼の経歴を再確認すると同時に、彼と同時代に政治的な活動を行ったとみられる人々に焦点を当て、彼の当時のアテナイにおける位置を探る。さらに、彼の政治活動を、すなわちアテナイ男性成年市民で構成されるアテナイ市民団の視点を含めて再構成する。そのために本稿は次のように論ずることとする。まず第2章にてストラトクレスの政治行動を改めて分析し、彼がどのような政治家であったか、考察する。次いで第3章では、ストラトクレスを当時のアテナイ政界に位置づけるため、当該時期に政治活動を行った他の人物について情報を収集し、分析を加える。第4章では、第2,3章の議論を受けて、彼の政治基盤について考察したい。結論では本稿の分析をまとめ、初めに示した論点へのフィードバックを試みる。

## 第2章 ストラトクレスの政治行動

本章ではストラトクレスが当時とった政治行動を分析し、彼がいかなる政治家であったか考察する。主として用いる史料はストラトクレス自身が提案した決議碑文と、プルタルコスが残した文学的史料である。第1章で述べたが、プルタルコスの史料を用いる際には、彼のバイアスに注意し、慎重にストラトクレスの行動を復元する。ここでは、プルタルコスがストラトクレスの追従として伝える両王に対する振る舞いを分析すると同時に、前304/3年を境にストラトクレスの振る舞いに変化するという研究者たちの未だ根強い主張についても考察する。

### 第1節 ストラトクレスは「追従者」か？

ここでは、ストラトクレスが王の「追従者」として現代の研究者に認識される原因となった前307年から前301年までの幾つかの出来事を再度検討する。とりわけ、両王の支配者崇拜の創設、クレアイネトスの書簡に関する事件、そしてエレウシスの秘儀へとデメトリオスが入信した際の祭事暦の改変の3つの出来事に焦点を当てる。これと併せて、先行研究上に見解の違いがみられる前304年以降の彼の振舞いに関してもここで議論したい。

まず、ストラトクレスが両王の支配者崇拜を定める決議を提出したことが、彼の「追従」としてプルタルコスによって言及されていることに注目したい。これについてはストラトクレスの同時代人である喜劇作家フィリッピデスも批判的な目を向けている。アテナイは317年から前307年までカッサンドロスが敷いた寡頭政にあり、さらにカッサンドロスが任命した哲学者ファレロンのデメトリオスが「監督者」として、アテナイの内政を指導することとなっていた<sup>39)</sup>。これに対して、前315年に「ギリシアの自由」を宣言したアンティゴノス

は、前 307 年にデメトリオスをアテナイに派遣。カッサンドロスが軍を駐留させていたペイライエウスを奪取し、アテナイに「自由」を与えたのである。この時両王のために支配者崇拜を設置することをアテナイでは定めるのだが、その決議を起草したのはストラトクレスだったという<sup>40)</sup>。

既に指摘されているように、アテナイは「自由」の付与に対して相応の名誉を与えなければならなかったという事情があったと考えられる<sup>41)</sup>。また既にスケプシスにおいてアンティゴノスは支配者崇拜を受けており、彼を顕彰するには、スケプシスのそれと同等の顕彰を与える必要があったはずである<sup>42)</sup>。こうした点に照らせば、彼の決議提案は極めて実用的なものであり、「追従」として否定的な評価を与えて片付けることは最早できないだろう。

続いて、クレアイネトスの書簡に関する出来事、そしてエレウシスの秘儀へとデメトリオスが入信した際の祭事暦の改変について触れるが、その前に、前 304/3 年の出来事について言及する必要がある。多くの研究者は、アテナイに対する介入が強まるこの前 304 年の出来事は、両者の関係において明白な分水嶺である、と考えているのである<sup>43)</sup>。

前 307 年の自由付与以来、以前の寡頭政の後ろ盾であったカッサンドロスはアッティカに断続的に侵攻し続けていた。このいわゆる「四年戦争」の最後の年に、カッサンドロスは中心市域まで到達、包囲を開始すると、アテナイはデメトリオスに援助を要請した。ロドス攻囲に失敗していたデメトリオスはこれを受諾。艦隊と多数の軍隊を連れてアッティカに到着するとカッサンドロスの軍を駆逐し、アッティカの要塞フェレーとパナクトンをアテナイに回復させた。さらにデメトリオスはカッサンドロスをテルモピュライ以北まで潰走させ、テルモピュライ以南のギリシア諸都市に自由を与えたのであった<sup>44)</sup>。これに対してアテナイは多くの名誉をデメトリオスに付与した。最たるものとしてブルタルコスが言及しているのは、パルテノン神殿の一室をデメトリオスの宿舍として定めた決議である<sup>45)</sup>。これによりデメトリオスはアテナイ市中心部において自身の拠点を得て、行動を取ることが可能になったと考えられる。さらにこれを契機とし、デメトリオスはアテナイに対して強い影響を及ぼしていくこととなる<sup>46)</sup>。

その一つとして知られるのが、クレアイネトスの処遇を巡って生じた騒動である。デメトリオスがアテナイで冬営中、クレアイネトスなるアテナイ市民が、彼の父クレオメドンに課せられた巨額の罰金の免除を民会に申し出た時のことである。彼の罰金を免除すべしとの旨が書かれたデメトリオスの書簡を持参したことから、民会は罰金の免除を決議した。しかし同時に、デメトリオスから得た書簡を民会に提出してはならない、とも決議した。デメトリオスがその措置に立腹すると、アテナイ人たちは恐怖し、直ちに決議を廃止しただけではなく、提案した人々や賛成した人々を殺害・追放した上で、ストラトクレスの提案によってデメトリオスの命令を神によるそれと等しいものとする決議を出したのである<sup>47)</sup>。

さらに、クレアイネトスの処遇を巡る出来事から、半年ほど過ぎた前 303 年のムニキオン月<sup>48)</sup>に、再びアテナイにやって来たデメトリオスは、アテナイにおいてエレウシスの秘儀

の全ての儀礼への参加を望み、強引に暦を改変させたさせた。本来ならば、秘儀の最高位である「エポプテシア」に与るには少なくとも2年を要するところを、祭儀歴を変更することで、2ヶ月で済ませてしまったのである<sup>49)</sup>。日程変更の決議を提出したのは再びストラトクレスであったという。結果、デメトリオスは秘儀への入信に成功したが、アテナイの伝統的宗教儀礼を侵害することとなった<sup>50)</sup>。

こうしたストラトクレスの施策は、彼の「追従」策の一部として現代の研究者に捉えられてきた。ストラトクレスと同時代人である喜劇作家フィリッピデスとデモカレスが彼を批判したことに加え<sup>51)</sup>、プルタルコスがこの出来事に言及しつつ、ストラトクレスは「阿りゆえに (διὰ τὴν κολακείαν)」利益を得ていたと述べたことが<sup>52)</sup>、そうした認識を産む原因となったと思われる<sup>53)</sup>。しかし、実際にプルタルコスの記述を注意深く読み解くと、むしろ、ストラトクレスがそれぞれの事件で提案した決議は、あくまでデメトリオスの干渉に対する応対という形で提案されていることがわかる。もしそうだとするならば、彼の施策を「追従」として切り捨てることはできないのではないだろうか。特に後者に関しては、王が書簡受取拒否に対して激怒したことに照らせば、ストラトクレスの行動は王の機嫌を取り、暴力を未然に防ぐ目的があったと推測することができる。両王は都市に配慮を示すよう行動していたとはいえ、前305年に行われたロドス島の攻囲戦が明らかにしたように、王たちの要求を吞まず、彼らの機嫌を損ねることは、都市や市民に危険を招く恐れがあっただろう。こうした行動をとった彼の意図を明らかにすることは困難だが、彼の行動は少なくとも自己利益のみを追究した追従策ではなく、むしろ都市と両王とのあいだを取り持ち、都市に利益をもたらすものであったとすることができる。

ところで、ストラトクレスを中立的にみようとする研究者にとっても、前304/3年は分水嶺として捉えられてきた。すなわち、この年を境に彼は私利私欲のために王たちや幕友に対して阿るようになったというのである<sup>54)</sup>。これに関して Paschidis は、碑文史料を基にこの議論を補強する見解を提出した。彼によれば、前304年以降にストラトクレスが王の幕友を顕彰するべく提案した決議では、以前とは異なり、被顕彰者の具体的な善行が描かれなくなったという。以前は特定の善行に対して顕彰を与えていたが、前304年以降は、王の部下として重要な位置を担っていた、という理由で顕彰を与えるようになったため、以上のような変化が生じるようになったのだという。その結果、ストラトクレスにとって顕彰は、王たちを満足させるための道具となり、こうした施策を通じて都市よりも自身の地位上昇を狙ったのだという<sup>55)</sup>。

碑文史料を利用して新たな見解を打ち出した点は評価されるべきだが、彼の見解については幾つか疑問点がある。まず、Paschidis が列举した顕彰事例の多くは外交に関連した顕彰であるが、Kralli が指摘したように、外交に関連した顕彰は軍事に関連した顕彰よりも内容が単純化されやすい<sup>56)</sup>。それは、Herman が指摘したように、顕彰理由が定型化される傾向にあることが理由と考えられる<sup>57)</sup>。また、Billows も指摘するように、被顕彰者からの善行

や配慮を促すために、顕彰が善行に先んじることもある<sup>58)</sup>。善行が抽象化されたからといって、それが都市と被顕彰者との関係から外れ、ストラトクレス本人と両王や被顕彰者を関係付ける機能を有したとは直ちに断言できない。Paschidis の議論を受け入れるのは困難である。

最後に、ストラトクレスは単独で「追従」を行ったではないということを指摘しておきたい。確かに、彼は幕友に対する顕彰を多数残した。しかし彼以外にも同様の行動を取った人物が知られる。例えば、文学的史料上から知られるのは、スフェットス区出身の政治家ドロモクレイデスである<sup>59)</sup>。プルタルコスはそのことを「ῥήτωρ (弁論家)」と紹介していることから<sup>60)</sup>、政治家の一人であったと思われる<sup>61)</sup>。プルタルコスは彼をストラトクレスの一味の一人として認識している上に<sup>62)</sup>、ドロモクレイデス自身はアンティゴノスとデメトリオスから神託を伺うという提案を行っていることから、ストラトクレスと同じような決議の提案などを行った人物である可能性が高い<sup>63)</sup>。さらにプルタルコスは、支配者崇拜の設立に関して、「他の何者か卑屈さでストラトクレスに勝る人々」の存在を伝える<sup>64)</sup>。支配者崇拜の内容に関してストラトクレスが単独で決定したわけではない。また、碑文からも、同様の動きを看取できる。アンティゴノスの部下に対する顕彰ではあるが、少なくとも3名の提案者が確認できる<sup>65)</sup>。幕友に対する顕彰決議碑文は前307年から前301年までの期間において29例確認されており、この内13例はストラトクレスの提案によるものである。残りの14例は欠損ゆえに提案者が明らかなではない。この提案者不明の決議が、ストラトクレス以外の政治家であった可能性は十分考えられる<sup>66)</sup>。ストラトクレスは、有力であったことは確かながら、王たちへの「追従」を行った人々のうちの一人でしかないと考えられる<sup>67)</sup>。

## 第2節 ストラトクレスの他の政治行動

ここまでストラトクレスが王に関して行った施策は必ずしも追従とはいえないであろうことを指摘してきた。次いで、この議論を補強するために、彼が他に行った行動を見ていく。まず、彼は幕友や王と関係がない顕彰を幾つか残している。例えば、彼は前307年以降にアテナイに使節を派遣したコロフォンの市民団やブリエネから派遣された使節の顕彰を提案している<sup>68)</sup>。他に王と関係なくアテナイに軍事的援助をもたらした人物に対しても、彼は顕彰を提案している<sup>69)</sup>。さらに前301年には、シケリアから穀物を輸送し安価で提供した人物に対して顕彰を提案している<sup>70)</sup>。こうした顕彰からは、両王に対する配慮だけでなくアテナイ内外の状況に対する彼の配慮を示している。

他にも、注目すべき決議として、前307/6年の冬ごろに動議され決議された、前340年代に活躍した政治家であるリュクルゴスに対する顕彰決議がある。リュクルゴスは、カイロネイアの戦い以後の時期において、前338/7年、あるいは前337/6年から約12年間にわたって、財務長官ともいべき職に就き、アテナイの財政政策の実権を掌握した人物である。彼の国政全般にわたる施策は、マケドニアの支配と重なって、アテナイに史上空前の繁栄をも

たらしめたことが知られている。彼は 325 年に死去していることから、この顕彰決議は、死後 18 年を経ってから彼に送られた死後顕彰決議と言える。この決議の文言は第 4 章で詳しく検討するとして、ここでは、Gastaldi が述べるように、ファレロンのデメトリオスによる寡頭政から民主政に国制が変更され、指導的役割を担う人々が入れ替わり、市民権を回復した人々が再び市民団に編入されるにあたって、市民団の統合を強める機能があったと考えられることを指摘しておきたい<sup>71)</sup>。

ここまでストラトクレスの政治的行動を考察し、彼が、たとえ親両王的な態度を取っていたとしても、以前の研究のように「追従者」とみなすはできないことを確認した。また、前 304/3 年を分水嶺として、ストラトクレスに変化が生じたとする学説についても批判を加え、彼の政治行動に変化が確認できないことを示した。

### 第 3 章 ストラトクレスの政治的位置

次に、ストラトクレスを当時のアテナイ社会に位置付けるために、彼と同様に活動を行った人物の情報を収集し、彼と比較・分析することを試みる。この時期の史料は、ヘレニズム期にあっては比較的豊富にあるとはいえ、その情報量は極めて断片的である。従って、史料の制限から分析のいくつかは仮説的にならざるを得ない。

#### 第 1 節 当該時期の政治家たち—プロソポグラフィ的分析

本節では、アテナイにおいて一体いかなる政治家たちがどのように活動していたかを明らかにし、アテナイ国内の政治情勢を把握に努める。本節では、前 307 から前 301 年の間に活動した政治家をリストアップし、いかなる人物が政治活動を行い、その活動、出自、役職就任を調べて、特徴を把握したい。50 頁の表一はこの時期に政治活動を行った人物の一覧である。ここでの政治活動とは、(一) 決議・法の提案 (二) 弁論家として法廷で活動 (三) 軍事・外交・財務に関連する役職への就任を指すこととする。また、(四) 彼自身かその家族が以前から何らかの政治活動を行っており、この時期においても存在が確認できる人物についても、当時のアテナイの状況を把握するのに有益と考え、表に加えた。

では、こうした人々を概観して、どのようなことがわかるだろうか。まず特徴として、当該時期以前から活動を行っていた人物、あるいは祖先の活動が知られている人物が、この時期にも政治活動を行っていた事実を挙げることができる。例えば、ストラトクレスは祖父の代から富裕であるうえに、ハルパロス事件に参加するなどラミア戦争以前の活動が知られている。さらに、9 番のレウコノエ区の政治家デモカレスがいる<sup>72)</sup>。彼もまた、少なくとも祖父の代から公共奉仕を遂行するという裕福な家庭の出身であり、さらにデモステネスの甥という良い血筋を有していたことが知られている<sup>73)</sup>。彼はラミア戦争頃から既に政治家としての活動を展開していたが<sup>74)</sup>、この時期においても、哲学の学園閉鎖を提案したソフォク

レスの弁護演説<sup>75)</sup>、市壁の建設に関する提案<sup>76)</sup>、そして四年戦争の際にはボイオティアとの外交交渉を担うなど<sup>77)</sup>、政治家として積極的に活動していた。また、後に触れるように、彼はこの時期に将軍に就任した可能性がある。さらに、彼自身が記した史書の断片から、ファレロンのデメトリオスの治世においてもアテナイにいた可能性が指摘できる<sup>78)</sup>。このように寡頭政下でも動向を把握できる事例はデモカレスだけではない。同様に寡頭政権期にも活動していた人物が再び当該時期にも現れていることは注目に値する。10番にあげたテロクレスは、前319／8年には評議員を務め、前311／0年には決議の提案も行っている<sup>79)</sup>。彼は前307年以降の民主政においても評議員を務めているのである。また、リスト12番のケファレ区フィロクレスの子フィリッピデスは、父が三段櫓船奉仕を務めており、相当富裕な出の人物として知られる<sup>80)</sup>。彼自身は喜劇作家であり、ファレロンのデメトリオスの治世にも活動していた<sup>81)</sup>。後に彼は「言葉の上でも行動の上でも民主政に反対することを一切行わなかった<sup>82)</sup>」ために顕彰を受けているが、実際には民主政ではないとされる時期にも活動していたらしい。無論、32番のドロモクレイデスや24番のオリュンピオドロスのように、出自や以前の経歴が全く把握できない人物も存在している<sup>83)</sup>。オリュンピオドロスは後に触れるが、スフェッ투스区出身のドロモクレイデスはストラトクレスと同様に両王に阿りを行なった政治弁論家として知られる<sup>84)</sup>。だが、彼らが以前から活動していなかったとは史料の問題から断言できない。しかし、以前から富裕でありアテナイで政治活動に関与した人々が再び活動しており、彼らの多くが未だ政策立案の中枢を占めていたことから、幾度にも渡る支配者の交代があっても、アテナイにおいて完全に新興の勢力が台頭したわけではないということは言えよう。また、デモカレスやテロクレスの事例は、前322年から前307年までの4度の体制変更がアテナイの富裕者層にもたらした影響を低く見積もるべきことを示していると思われる<sup>85)</sup>。

次に、公職や外交使節の就任者について触れていきたい。こうした役職は必ずしも政治と関係するわけではなかったが、役職に就く人々の多くは多くの場合裕福であり、弁論や軍事に関する専門的な技術や、外交や財政に関する知識を持って政治活動を行う人々であった<sup>86)</sup>。特に軍事を指揮する将軍職は、前4世紀中葉には、それ以前と比べて相対的に政治に対する重要性を失ったとはいえ、前5世紀以来、政治に対する影響力を持ちうる役職であったことは言を俟たない<sup>87)</sup>。まず、財務長官とされる職に就いてみていきたい。内務全般に対して権力を行使可能であり、選挙によって選出される役職であるこの職は、前4世紀中葉に成立した時には国内で著しく重要な役職であり、前340、前330年代にはリュクルゴス、そしてリスト5番に示したクセノクレスという人物が就任していた<sup>88)</sup>。この役職にはハブロンと、フィリッポスがそれぞれ一度ずつ就任したことが確認できる<sup>89)</sup>。ハブロンはリュクルゴスの息子であり、彼らは宗教的権威を有した最有力家系に属している。ハブロンはリュクルゴスがかつて務めたこの財務長官職に再び就任しており、二代揃って専門的能力を有していた可能性を示唆させる<sup>90)</sup>。一方フィリッポスは、以前の活動は知られてはいないものの、

前 306/5 年には軍事財務官も務めていることに加えて、彼は、2 度の決議提案を行ったことがわかっている<sup>91)</sup>。財務長官にはこうした人々が就任したが、彼らがこの時代に具体的にいかなる影響力を有したかは定かではない。

また、6 名確認できる外交使節の半数は、国内においても重要な役割を果たしていたことが確認できる。まず、リスト 5 番に挙げたクセノクレスに注目したい。彼は、前 4 世紀中葉から既に様々な公職を歴任してきた<sup>92)</sup>。この時期には前 307 年にアゴノテス職に選出されていることが知られる<sup>93)</sup>。これは競技会の運営を担当し、その開催費用を拠出する役職である<sup>94)</sup>。この職を務めあげるのに必要な費用は、やや後代の史料ではあるが、前 215 年頃に決議された顕彰碑文によると、7 タラントンと高額であり、彼の財力の高さが窺える<sup>95)</sup>。このクセノクレスが、アンティゴノスに対する使節として、前 306/5 年に派遣されていることは特筆に値する。この時、アテナイはアンティゴノスから銀や木材と同時に、以前アテナイが所有していたレムノス島を与えられている<sup>96)</sup>。実際にアンティゴノスの許に派遣され、交渉を行った人々は極めて重要な役割を担ったはずであり、他の活動がほとんど知られていない 2 人と共に<sup>97)</sup>、クセノクレスは使節として最も適切な人物のひとりとして当時のアテナイ市民に認識されていたのだろう。その他に外交使節を務めたのは、將軍職をも務めたオリュンピオドロスとデモカレスがいる。オリュンピオドロスは、当該時期に名が初めて登場した人物である<sup>98)</sup>。彼は前 301 年以降も国政に関与し、前 287 年にはデメトリオスに対する蜂起を主導した人物である。四年戦争の際にアイトリアの助けを得るべく当地に使節として派遣された以外に、將軍としてカッサンドロスの軍勢と戦闘を行っている。一方、先ほどから名前が登場しているデモカレスは、四年戦争の際にボイオティアとの交渉を担った。また直接的な証拠はないものの、同じく四年戦争の最中である前 305/4 年に將軍を務めたと考えられている<sup>99)</sup>。なお、他に將軍となった人々については、名前が確認できるのが 5 名<sup>100)</sup>、碑文の欠損により名前が確認できないのが 5 名ずつわかっている<sup>101)</sup>。しかし彼らにかんする情報は他にない。

以上当該時期に政治活動を行った人々を概観してきた。次に、こうした人々の存在と併せてストラトクレスの位置付けを検討することとする。

## 第 2 節 ストラトクレスの政治的位置

本節では、前節での考察を踏まえ、国内におけるストラトクレスの政治的位置を把握することを試みる。本章ではここまで、前 307 年から前 301 年の国内情勢を把握するために、政治活動を行ってきた人々について分析を行ってきた。このような状況に、ストラトクレスはいかに位置づけられるだろうか。ストラトクレスは、前節でみてきた同時代に活動が知られる人々と同様に、前 4 世紀中葉から富裕であった家系に属していた。彼が以前からハルパロス事件に参加するなどの政治活動を行ってきたという事実を考慮に入れても、デモカレスやその他の人々のように以前から政治に従事した人物に照らしてみれば、彼が同時代において

もとりわけ特殊な出自と経歴をもった存在ではなかったということが出来るだろう。

しかし一方で、同時代の政治家たちと比較した場合、彼の経歴にはいくつか特筆すべき点がある。まず、史料から窺える限り、彼自身が何らかの役職に就任したという形跡を確認することができなかった。例えば彼は将軍職を務めた経歴を持たなかったらしい。一方で、ストラトクレスの政敵であったデモカレスは軍事指導に長け<sup>102)</sup>、上にみたよう直接的証拠はないものの、この時期に将軍職に選出されていたと思われる。他に将軍職を務めたオリュンピオドロスは、外交使節にも就任している。前4世紀には軍事を司る将軍職と政策立案を行う政治家が分離する傾向にあった<sup>103)</sup>。しかしこの頃から前3世紀全般にかけて、アテナイでは国境防衛やアッティカ内での戦闘の頻度が、以前よりも増加する傾向にあり<sup>104)</sup>、それに伴って、政治家が国土防衛において果たす役割の重要性が増大したためか<sup>105)</sup>、前3世紀において指導的地位に立つ政治家の多くは、多かれ少なかれ将軍職を経験するようになる<sup>106)</sup>。実際に当該時期においてはカッサンドロスがアッティカ域内に侵入を繰り返しており、オリュンピオドロスやデモカレスは、防衛の任を担った。こうした状況に照らせば、ストラトクレスには将軍職への就任や国土防衛への直接的貢献を期待されていなかった可能性がある。

さらにストラトクレスは、上で言及したオリュンピオドロス、デモカレスと異なり、外交使節として派遣されたことも知られていない。これに関連して、当該時期において、指導的役割を果たした人物は直接王と交渉するか、彼らと個人的な紐帯を有している場合が多いことに注目したい<sup>107)</sup>。例えば前4世紀後半に活躍した政治家デマデスは、カイロネイアでの敗戦後にマケドニア王フィリッポス2世の信任を勝ち取り、アレクサンドロス、アンティパトロスらマケドニアの指導者との20年近くに渡って交渉を担っている<sup>108)</sup>。同じくフォキオンも、アンティパトロスとの私的紐帯を保持していた<sup>109)</sup>。これは当該時期やそれ以降の政治家についても同様に言えることである。例えば、喜劇作家フィリッピデスは後継者の一人であるリュシマコスの「幕友」であったことが知られており、その私的紐帯を通じてリュシマコスからアテナイに物資を提供させることに成功している<sup>110)</sup>。しかしストラトクレスにはそうした経験はみられない。またプルタルコスには、ストラトクレスと両王とのコネクションを示唆する記述はない。こうした点に鑑みるに、彼には両王との私的紐帯を持たなかったのかもしれない。少なくとも、アンティゴносへの使節にストラトクレスが選出されなかったという事実は、前306/5年の時点では彼が両王との適切な交渉役として認識されていなかった可能性を示唆している。

以上、本章では史料が許す限りストラトクレスの経歴と、彼のアテナイにおける位置付けを考察してきた。彼は同時代の他の政治家とやや異なり、将軍職など選挙で選出される役職への就任や、外交使節として活動した経歴を持たなかった可能性がある。それでは、ストラトクレスの政治的地位を維持したのは、いったい何だったのだろうか。それを明らかにしな

ければ、ストラトクレスという人物がいかなる存在であったか、十分に認識することは出来ないだろう。次章では、その点を考察したい。

#### 第4章 「追従」を支えたもの

第1章で既に述べたが、ストラトクレスの政治的行動の基盤が少なくとも祖父の代から続く財力にあったことは確かだろう。彼の父と祖父は複数回公共奉仕をこなしており、ストラトクレス自身もその富を引き継いでいたと思われる。さらにこの時期には、少なくとも4度に渡る政治を指導する人物の追放や処刑があり<sup>111)</sup>、彼にとって活動しやすい環境があっただろう。その他に、彼の政治活動の基盤となったものは何だったのだろうか。これに関して、改めて彼が提案した決議に注目することで、検討してみたい。

まず、第2章で触れた前307/6年のリュクルゴス顕彰決議の文言に改めて注目したい。この決議碑文は2つの断片で構成されている<sup>112)</sup>。上辺となる断片aは高さ0.26m、幅0.27m、厚さ0.115mで、10行の碑文が刻まれている。こちらはアゴラ、アッタロスの柱廊の南側で1860年に発見された。一方、断片bは高さ0.前30m、幅0.23m、厚さ0.12mであり、24行の碑文が刻まれている。こちらは、アクロポリスで1862年に発見された。断片a、bともに激しく損傷しており、読解には必然的に補いが多くなっている。しかし、校訂の大枠を決定したKoumanoudis (断片a、b)<sup>113)</sup>、Curtius (断片b)<sup>114)</sup>、またその後の断片bに関する細かな点の修正<sup>115)</sup>は支持できるものとみてよいと思われる。というのも、大変珍しいことに、この決議の起草文が伝ブルタルコスの記述によって伝えられているのである<sup>116)</sup>。この決議に注目する理由は、ストラトクレスが提案した数少ない市民顕彰の一つであり、また、碑文として刻まれた文言がとても特徴的だからである。

この決議には、リュクルゴスがアテナイに対して伝統的に善行を行ってきた家系であること、数行の欠損の後、彼がアレクサンドロスと敵対したことが述べられる。最後に、リュクルゴスはボリスの自由と自治を尊重し、民主政の公正さを重視する人物であったとということが示される。ここでは、アレクサンドロスに関する記述に注目したい。9行から21行には、以下のような文言が見える。

…そし〔て大いなる〕恐怖〔と危険が〕ギリシアを取り囲んだ時に、アレ〔クサンドロス〕が〔彼らを支〕配し、〔アジア全土と人の住む世界の?<sup>117)</sup>他の部〕分を転覆すると、市民団の〔た〕めに、彼と〔敵対し〕続〔け〕、その全生涯の間、〔自身を〕祖国と〔全ギリシアの安寧の〕ために、そして〔ボリスの〕自由〔のために〕清廉で〔非の打ちどころがない〕者とし、〔ボリスが〕自由でありかつ自〔治〕である〔ためにすべての企みと戦〕った。〔アレクサンドロスが彼に〕要求〔したこと〕に関して、〔市〕民団は、どんな場合においてもリュクルゴスが持つ正当な弁明を知っており、要求を受け入れ、説得されるこ

とを拒絶した。

リュクルゴスはアレクサンドロスと敵対し、ギリシアとアテナイのために戦ったという。しかし、ここで注目すべきは、その後の記述である。ここでは、主人公（＝被顕彰者）であるはずのリュクルゴスは一時的に行爲の客体へと退き、アレクサンドロス大王に対する市民団の団結と抵抗が強調される。前後の文脈からみて、「市民団の抵抗」がやや唐突に挿入されているような印象を受ける。実は、この箇所は現在明らかになっているクロノロジーに照らすと誤りである。というのも、史料上に現れるリュクルゴスの引き渡し要請は、実際はアレクサンドロスの東征前の、テーバイ破壊後なのである<sup>118)</sup>。さらに、東征後にはリュクルゴスは既に死んでいるため、アレクサンドロス大王が東征から戻った後に引き渡し要請があったというのは誤りである。<sup>119)</sup> 碑文の決議から20年ほど前の出来事がどれほど正確に記憶されていたか不明である。ここで文言の正確さについて議論しても、あまり意味があることではない。問題となるのは、被顕彰者ではなく顕彰主体が顕彰理由に描かれた出来事の主体となっているのか、そしてなぜこうした文言を持った決議がこのタイミングで決議されたのか、ということである。この決議では、アテナイがアンティパトロスやカッサンドロスによって国制の変更を強要される以前の状況と、前307年という今を結び付ける連続を「創出」する。こうした文言は、現在よりも自由に国際舞台で活躍したかつてのアテナイを想起させ、過去の民主政と新たに設置された民主政との間に連続性を作り出す機能を持ったと考えられる。さらにここでは、アレクサンドロスをアテナイ市民団の敵として描くことで、市民団の団結の強さが強調されている。

このような動議を提出したストラトクレスの意図については、決定的な証拠が欠けており、明らかではない<sup>120)</sup>。しかし、この決議が民会で読み上げられ、アゴラやアクロポリスに彫像や碑文が建立されることで、アテナイ市民は、ストラトクレスが民主政を支持する人物であるという印象を受けたことだろう<sup>121)</sup>。先にも述べたが、この時期、アテナイはカッサンドロスが決定した、財産額に基づく市民権制限が廃止され「自由」を与えられたことで、全成年男性市民が参加可能な民主政を設置していた。ストラトクレスは、ファレロンのデメトリオスの政治体制に与していなかったとしても、寡頭政の許で市民権を維持したはずである。こうした中で、民主政支持者であると見られることは、指導に有利に働いたであろう<sup>122)</sup>。また、幕友に関する決議についても、改めてストラトクレスが提案した文言に注目すると、興味深い事実が浮かび上がってくる。しかしその前に、ストラトクレスが提案した顕彰決議の全容を確認しておきたい。

前307年から前301年の間に彼が提案した決議は全部で26例の決議が確認されている。このうち文学的史料からは4例<sup>123)</sup> 確認されており、それ以外の22例は全て碑文史料である。碑文史料については、筆者が確認した限りでは、当該時期には少なくとも130ほどの決議碑文が確認でき<sup>124)</sup>、そのうち15%を彼が提案した決議が占めているということになる

う<sup>125)</sup>。また、この中で、年代の正確な同定が不可能である4例<sup>126)</sup>を除くと、前307年から前305年までは8例<sup>127)</sup>、前304年から前301年の期間においては10例の顕彰決議碑文が存在する<sup>128)</sup>。これらのうち、両王の幕友に対する顕彰の提案、あるいはそうと推測されている決議がほとんどを占め、13例と最も多い<sup>129)</sup>。それ以外にはプリエネといったギリシア諸都市から派遣されてきた使節への顕彰が3例、欠損によって情報が残っていないものが4例ある<sup>130)</sup>。

こうした決議において注目に値するのは、幕友たちの行動がアテナイの市民団やギリシア諸都市への軍事的・外交的貢献以上の意義付けをされている、という点である<sup>131)</sup>。

[... 欠 ...] デ [イ] オメシア区エウテ] ユデ [モスの子ストラトクレスが] 提議した。  
[... 欠 ...] オティモスは以前ボレマ [イオス] によってエウボリス海峡の警備 [に] 任ぜら [れ]、彼が [死] ぬと、カ [ルキディケ人にエ] ウボリス海峡を返還し、王アンティゴノスとデメトリオスの [政] 策に従 [って] 彼らの [都市が] 自由になる原因となった。今、カッサンドロスがアテナイの [市民] 団 [に] 向けて都市の [隷属のために] 進軍し [以下欠]

これは、前306年頃に決議されたと考えられている、両王の部下であり、カッサンドロスの侵攻に際してアテナイを援助するためにギリシアに残された [... 欠 ...] オティモスへの顕彰決議である<sup>132)</sup>。この決議において彼は、アテナイを援助しただけではなく、以前に、両王に従ってカルキディケの自由獲得に貢献した、と伝えられる。このように幕友たちを顕彰する決議において、彼らの行動は、アテナイの市民団やギリシア諸都市の「自由」さらに「民主政」<sup>133)</sup>への貢献と解釈されている。こうした顕彰決議の意義やアテナイ市民団にとっての意味合いは、紙幅の関係から別稿にて論ずるが、少なくともここでは、このように彼ら幕友たちの行動を解釈することで、支配されているという現実を読み替える効果があったであろうことを指摘しておきたい。提案者であるストラトクレスは、「父祖伝来の国制」を「民主政」と解釈し、「王デメトリオスとその幕友たちは、アテナイの『自由』のみならず『民主政』に関心がある」ということを提示しようとしていたのかもしれない<sup>134)</sup>。このように顕彰碑文のテキスト上では、幕友たちの行為は民主政への貢献というアテナイ市民団の価値観に合うように解釈されている。

このようにストラトクレスは、現在の政体にあった価値観を、決議の提案を通じて提示している。ストラトクレスは民会において「劇的」な言語を用いた決議提案を行い、それらを可決させ、碑文として建立させることに成功していたのである。ストラトクレスは、前322年、ラミア戦争中に行われたアモルゴスの海戦に関して、同様に「劇的」なパフォーマンスを行っていることが知られる。プルタルコスは次のように伝える<sup>135)</sup>。

またアテナイ人たちがアモルゴスで敗北した時、報告が来る前に彼は冠を付けてケラメイコスを通り抜け、アテナイ人は勝利したと布告して、吉報を祝う犠牲をする決議を提議して、部族毎に肉を分配した。少しして船の残骸が戦地から来て、市民団は怒って彼を呼び出すと、彼は無鉄砲にも騒ぎに立ち向かって言うことには「して、二日間喜んでいて、何を恐れているのか？」と。ストラトクレスの激しい厚かましさはこのようなものであった。

この逸話においてストラトクレスは敗北を隠蔽し、アテナイ人に誤った情報を伝えている。彼自身が述べるように、この行動はアテナイ人たちが敗北の事実を知った後に落胆し、マケドニアに対して恐怖しないよう先手を打つ目的があった。この逸話から読み取ることが出来るのは、当時マケドニアからの独立を目指したアテナイを励まし、戦争を続行するために市民を鼓舞する彼の態度である。ブルタルコスが残した記述の性質上、こうした行動を彼が実際に取ったかは明らかではない。しかし、先に見た顕彰決議の提案と同様の「劇的」なパフォーマンスをストラトクレスが行っていたという可能性を示すものであると言える。このようにストラトクレスは、「劇的」なパフォーマンスを用いて、市民を指導する政治家であったと考えられる<sup>136)</sup>。

## おわりに

ここまでの考察をまとめたい。まずストラトクレスは、彼に関する史料を残したブルタルコスや、それを受けたかつての研究者たちが考えてきたような「追従者」ではなく、彼の行動は都市の利益にもなり得るものであった。それと同時に、彼が行った「追従」は同時代の他の政治家に共有された行動であった。その一方で、ストラトクレスには同時代の他の有力政治家のように、軍事・外交面での活躍はあまりなかった可能性が高い。しかし彼は、「劇的」な言語やパフォーマンスを用いて、市民を指導する政治家であったと考えられる。

最後に、この結論が「はじめに」で示した本稿の課題に対していかなる意義を持つか、考えたい。まず本稿では、ストラトクレスの両王に対する「追従」は、確かに彼自身に利益を与えたと思われるが、しかし両王との交渉の必要から生じたものであったことを示した。この結果は、「ギリシアの自由」を掲げた両王の許でも、都市は従属的な地位にならざるを得なかったことを改めて示す。また、利益といっても、既に前 324 年に政界デビューを果たしていたストラトクレスには、前 307 年に両王によってカッサンドロスの支配から「解放」され、「自由」を与えられた時点で、政治の技術的にもアテナイでの地位としても、十分最も有力な政治家として活躍できる下地はあったと考えられる。従ってその利益とは、デモカレスらが両王の暴力に反発して追放された出来事が示すように、あくまで両王の支配の中に収まっている限りにおいて、都市の指導者として活動が可能になる、という性質のものであった。

と考えられる。

その一方で、ストラトクレスが示したパフォーマティヴな政治行動は、以上のような制限の許でも、政策立案や指導者としての地位維持のために、市民団との交渉が必要不可欠であったことを示唆する。これについては、以前の寡頭政体ではフォキオンによる市民団の意見の拒絶<sup>137)</sup>、ファレロンのデメトリオスによる独自の法制定といった特定の個人が政治権力を独占した状況とは異なり、制度として全男性市民が参加可能である民主政であったことと、両王が「自由」をアテナイに与え、都市の監督役を置かなかったことが要因だと考えられる。もしそうだとするならば、ストラトクレスは「ギリシアの自由」を掲げた両王の支配の中で登場した政治家の代表的事例として、改めて定位することができるかもしれない。彼をもってヘレニズム時代初期のギリシア都市の代表例として論ずるためには、他の都市の事例を検討する必要があるだろうが、当該時期におけるギリシア都市の民主政の在り様、あるいは両王の支配の影響を政治実践の側面から解釈する一つの重要な事例とすることができるだろう。

## 注

文学的史料は注記がない限りトイブナー版を用いた。ただし節、段落の分け方はローブ版に従っている。また、史料は筆者による試訳であり、引用内の（）は筆者による補い。また碑文史料の試訳中に示される〔〕は校訂者による補いを表す。史料等の略記号は繰り返し引用する文献については「著者のファミリーネーム 年代：ページ数」の形で略記する（例：Bosworth 2002: 17-19）。

- 1) Bosworth, A. B., 2002, *The Legacy of Alexander: Politics, Warfare, and Propaganda under the Successors*, Oxford: 17-19.
- 2) 大牟田章, 1971, 「アンティゴノス王権の構造と政策」『西洋古典学研究』19, 78-89.
- 3) Cf. Billows, R. A., 1990, *Antigonos the One-Eyed and the Creation of the Hellenistic State*, Berkeley: 196-236.
- 4) Billows 1990: 5, cf. 325.
- 5) Gauthier, P., 1985, *Les cités grecques et leurs bienfaiteurs (IVe-Ier s. av. J.-C.). Contribution à l'histoire des institutions*. Paris.
- 6) こうした研究については例えば Ma, J., 1999, *Antiochos III and the Cities of Western Asia Minor*, New York (2nd edn., rev. and corrected 2002) が挙げられる。
- 7) Plut. *Demetr.* 8.2.
- 8) Plut. *Demetr.* 24.5.
- 9) Traill, J. S., 1975, *The Political Organization of Attica*, Amsterdam: 39.
- 10) ストラトクレスの生年と家族については APF 12938 を参照のこと。
- 11) Plut. *Demetr.* 11.2.
- 12) なお、かつてストラトクレスは前 335/4 年に開催されたアンフィアライア祭の少年五種競技において優勝したと考えられてきた (cf. APF, p. 495)。しかし祭の年代が前 329/8 年かそれ以降と同定されたことにより、現在では否定されている (cf. Luraghi, N., 2014, 'Stratokles of Diomeia and party politics in early Hellenistic Athens', *C&M* 65: 192, n. 4)。

カイロネイアの戦いの際に將軍を務めた同名の人物がおり、このストラトクレスと同定されることもあるが (e.g. Athenaeus, 2010, *The learned Banqueters*, Books 12-13.594b, (ed. and trans. by S. D. Olson) Cambridge MA/ London, 356, n. 237), ストラトクレスが 350 年代に生まれたとすれば、カイロネイアの戦いの頃にはせいぜい 18 歳程度であり、制度上では將軍になることはできない。従って別人であると思われる。

- 13) Cf. 澤田典子 2005, 「前 320 年代後半のアテナイの政局——ハルパロス事件を中心に——」『史学雑誌』114: 194; Bayliss, A. J., 2011, *After Demosthenes: The Politics of Early Hellenistic Athens*. London: 154-155.
  - 14) 例えば、前 323/2 年に生じたラミア戦争の際には、アモルゴスの海戦においてアテナイ海軍が敗北したという情報が入る前に、アテナイは海戦で勝利したとの布告を行い、勝利を感謝するための犠牲式を挙げるべきことを提案している (Plut. *Demetr.* 11.3, *Mor.* 799f)。しかし前 322 年から前 307 年までのストラトクレスの経歴については史料が無い。これについては Kralli, I., 1996, 'Early Hellenistic Athens: Leadership and Diplomacy', Diss., University of London: 137-138 を参照のこと。
  - 15) Cf. Osborne, M. J., 2012, *Athens in the Third Century B.C.*, Αθήνα: 22.
  - 16) 王の側近である「幕友」についてはさしあたり Habicht, C., 1958, 'Die herrschende Gesellschaft in den hellenistischen Monarchien', *VSWG* 45: 1-16; Strootman, R., 2013, 'Dynastic courts of the Hellenistic Empires', in H., Beck ed., *A Companion to Ancient Greek Government*, Malden, MA/Oxford/Chichester: 38-53 を参照のこと。
  - 17) Mikalson, J. D., 1998, *Religion in Hellenistic Athens*. Berkeley: 77; Bayliss 2011: 152-153 を参照のこと。また、民主政が復活したとされるこの時期に活動したことに加え、4 世紀中葉に活躍し、この時既に死亡しているリュクルゴスを顕彰する決議を提案したこともあって、ストラトクレスは民主派の政治家であったとしばしば考えられてきた (Luraghi 2014)。
  - 18) Habicht, C., 1997 *Athens from Alexander to Antony*, (trans. D. L. Schneider) Cambridge: 79.
  - 19) *IG* II<sup>3</sup> 1, 857.
  - 20) なお、彼の子孫は知られていない (Kralli 1996: 145)。
  - 21) 「デメトリオス伝」は、アッティス誌家フィロコロスやサモス人ドゥリスを中心とした同時代かつ実際に彼らがその場に居合わせた可能性の高い歴史家を基に作品を構成したことから、出来事に関しては、一定の信を置くことが可能である。史料の典拠に関してはさしあたり Sweet, W. E., 1951, 'Sources of Plutarch's Demetrius' *CIW* 44: 177-181 を参照のこと。また、プルタルコス「デメトリオス伝」の研究史については、やや古いが Podlecki, A. J., 1992, 'A Survey of Work on Plutarch's Greek Lives, 1951-1988' in W. Haase (hrsg.) *Aufstieg und Niedergang der Römischen Welt: Geschichte und Kultur Roms im Spiegel der neueren Forschung*. Teil II: Principat. Band 33: Sprache und Literatur. 6. Teilband, Berlin/New York: 4093 を参照のこと。
  - 22) Plut. *Demetr.* 11.2.
  - 23) 例えば Plut. *Demetr.* 12.4, 24.5, 27.3 などが挙げられる。
  - 24) Bayliss 2011: 152-153.
  - 25) Ferguson, W. S., *Hellenistic Athens: An Historical Essay*, London: 119-120, cf. 101-102. 引用はそれぞれ前者が 119 頁、後者が 120 頁。
  - 26) Dinsmoor, W. B., 1931, *The Archons of Athens in the Hellenistic Age*, Cambridge: 14.
  - 27) MacKendrick, P., 1969 *The Athenian Aristocracy 399 to 31 B.C.*, Cambridge, MA: 37.
  - 28) Philipp, G. B., 1973, 'Philippides, ein politischer Komiker in hellenistischer Zeit', *Gymnasium* 80: 497-498, 504.
  - 29) Κουμανούδης, Σ. 1986, 'Σώπτιμος Δωσιθέου Κυρηναῖος' *hóros* 4: 18.
  - 30) *OCD*<sup>1</sup>, s.v. Stratocles. なおこの項目には誤りが含まれている。彼が前 292 年に顕彰したのは喜劇作家のフィリッピデスではなく、将軍などを歴任したバイアニア区フィロメロスの子フィリッピデス (*PA/APF* 14361) であり、このフィリッピデスはリュシマコスとは関係がない。
- 我が国では、大牟田が君主崇拜をギリシアの衰退と関係づけて議論するなかで、ストラトクレスに否定的な態度を示している (大牟田章, 1996, 「ヘレニズム初期のギリシア世界における「君主崇拜」について」『歴史研究』4: 58-82, 特に 73-77)。また、岩田は民主政を破壊した人物としてストラトクレスに言及している (岩田拓郎, 1969, 「ヘラス——アテナイの場合を中心として——」荒松雄ほか (編)『岩波講座世界歴史 2——地中海世界 2——』岩波書店: 188)。
- Ferguson に代わる政治史の叙述を提供した Habicht は、ストラトクレスの「従順さ Willfähigkeit」が彼の「卑屈な手下 servilen Kreatur」という評判をもたらしたと評した (Habicht, C., 1995, *Athen:*

- die Geschichte der Stadt in hellenistischer Zeit*. München: 80, cf. Habicht 1997: 72)。他には Green, P., 1990, *Alexander to Actium: The Historical Evolution of the Hellenistic Age*, Berkeley: 48 が、おそらく独立のための活動だったと留保しながらも、「勤勉なごろつき sedulous apes」の一人としてストラトクレスに言及している。
- 31) 他に Mossé, C., 1973, *Athens in Decline, 404-86 BC*, London: 108-110 は、ストラトクレスを「間違いないデマゴーゴスである」としながらも、リュクルゴス顕彰決議をもとに、マケドニアからの独立を目指して活動した人物としていた。なおここでストラトクレスは、間接的に民主派のリーダーとして表象されている。
- 32) Gabbert, J., 1986, 'Pragmatic Democracy in Hellenistic Athens', *AncW* 13: 29-33, esp. 30-31. なお Gabbert の主張は、Dreyer, B., 1999, *Untersuchungen zur Geschichte des spätklassischen Athen (322-ca. 230 V. Chr.)* Stuttgart: 78; Grieb, V., 2008, *Hellenistische Demokratie: Politische Organisation und Struktur in freien griechischen Poleis nach Alexander dem Großen*. Stuttgart: 78 に継承されたが、Wallace, S., 2011, 'Freedom of the Greeks in the early Hellenistic Period (337-262 BC): a Study in Ruler-city Relations', Diss., University of Edinburgh: 164 によって批判を受けている。
- 33) Paschidis, P., 2008, *Between City and King: Prosopographical Studies on the Intermediaries Between the Cities of the Greek Mainland and the Aegean and the Royal Courts in the Hellenistic Period (322-190 BC)*. Athens: A19, 78-106, esp. 105-106.
- 34) Bayliss 2011. ストラトクレスの分析については 152-186 頁。
- 35) Ager, G., 2013, 'Post-democratic Athens' *CR* 63: 511.
- 36) 一方で、近年、政治制度に基づいてヘレニズム期の民主政を考察した Grieb は、ストラトクレスを「デメトリオスの党員 Parteigänger」と呼んでいる (Grieb 2008: 73)。なお、ストラトクレスの政治信条については近年 Luraghi 2014 がある。彼はストラトクレスが提案した顕彰決議の文言を分析し、少なくとも保守的な政治家であった、と指摘している。
- 37) Muccioli, F. 2008, 'Stratocle di Diomeia e la redazione trezenia del 'decreto di Temistocle'', *Studi Ellenistici* 20: 123; Bayliss 2011: 153.
- 38) Ager 2013: 511.
- 39) ファレロンのデメトリオスの治世については O'Sullivan, L., 2009, *The Regime of Demetrius of Phalerum in Athens, 317-307 B.C.E.* Leiden を参照のこと。
- 40) Diod. 20.46.2; Plut. *Demetr.* 10.3-4, cf. Mikalson 1998: 79-82; Habicht, C. 2017, *Divine Honors for Mortal Men in Greek Cities*, (tr, by J. N. Dillon) Ann Arbor: 31-34.
- 41) Cf. Paschidis 2008: 78-79; Erskine, A., 2014, 'Ruler cult and the Early Hellenistic City', in H., Hauben, H. and A. Meeus, eds., *The Age of the Successors and the Creation of the Hellenistic Kingdoms (323-276 B.C.)*. Leuven: 579-598.
- 42) *OGIS* 6, cf. Bayliss 2011: 160-161; Habicht 2017: 30-31.
- 43) 例えば Mikalson 1998: 87; Dreyer 1999: 174-180; Wallace 2011: 137-148 など参照のこと。
- 44) Plut. *Demetr.* 24.1-2.
- 45) Plut. *Demetr.* 24.3, cf. Mikalson 1998: 86-87.
- 46) Dreyer 1999: 151, 174-180 はこの時ペイライエウスに駐留軍を設置した可能性を提案している。この見解は Bayliss 2011: 125 によって根拠なしと批判されているが、デメトリオスの冬営に伴って、彼の指揮下の軍勢がアテナイに滞在したことは少なくとも想定できる。しかし、それ以前より、デメトリオス配下の兵が、対カッサンドロス戦のためにアテナイに駐留していた可能性がある。というのも、前 306 年から前 305 年にかけてランプサコス人アデイマントスが、アテナイの将軍として任命された可能性があるのである (Πετράκος, B., 1999, *Ὁ Λήμος τοῦ Παμνοῦντος*. I. Τοπογραφία, Αθήνα: 32-33, 430)。もしそうだとするならば、おそらく、アテナイでは史上初の外国人の将軍ということになる。「駐留軍の撤去」というスローガンを掲げたにもかかわらず実質「駐留軍」と呼べる軍勢がアテナイに存在していた場合に、アテナイ市民の一定の部分に対して心理的影響も少なからずあったかもしれない。
- 47) Plut. *Demetr.* 24.4. この事件の後、ストラトクレスと敵対関係にあったデモカレスが追放刑に処

されている。多くの先行研究はストラトクレスが追放に追い込んだものと認識している（例えば Billows 1990: 338 を参照のこと）。Bayliss は、追放についてストラトクレスは無関係だったと反論しているが（Bayliss 2011: 172-176）、親デメトリオスの態度をとるストラトクレスとの対立関係が、デモカレスの追放に影響を与えた可能性は十分考えられる。Shear Jr. T. L., 1978, *Kallias of Sphettos and the Revolt of Athens in 286 BC*, Princeton: 47-51 も参照のこと。

なお、同年には、デモクレスなる青年が、デメトリオスに凌辱されたことで自殺する事件も起きたと伝えられる（Plut. *Demetr.* 24.1-3）。

48) 現代の暦で4月後半から5月前半頃にあたる。新たな史料の発見により、この出来事の年代は従来の前302年から前303年へと引き上げられている（Paschidis 2008: 90-95）。

49) 秘儀の段階については、Mylonas, G. E. 1961, *Eleusis and the Eleusinian Mysteries*, Princeton: 238-239, 「エボプティア」については Mylonas 1961: 274-278 をそれぞれ参照のこと。

50) Plut. *Demetr.* 26; Diod. 20.110, cf. Mikalson 1998: 98-99.

51) Plut. *Demetr.* 12.4, 24.5.

52) Plut. *Demetr.* 24.5.

53) こうした出来事によって、アテナイ市民のあいだに両王と彼らに阿るかのようなストラトクレスの政策に対する不満が醸成されたと考えられてきた。確かに、反発の兆候と思しきいくつかの史料に確認される。まず、本文中でも述べるが、喜劇作家フィリッピデスがデメトリオスやストラトクレスに対して不満を表明したことが挙げられる。フィリッピデスは、彼の喜劇中において、ストラトクレスが両王を神格化したことが神々への不敬である、として、その年にあった異常気象の原因を彼に帰す（なお Sommerstein, A. H., *Talking about Laughter and Other Studies in Greek Comedy*, Oxford, 2009: 275, n. 13 は、フィリッピデスの喜劇は、イブソスの戦い以後、ストラトクレスの勢力が弱体化してから時期に上演された可能性を指摘している。また Bayliss 2011: 163 は、フィリッピデスの喜劇における批判が、必ずしもアテナイ市民の多数に影響を与えたわけではない、とし、彼の批判の意義を低く見積もる）。ストラトクレスの不敬に対する非難と同時に、彼の扇動が民主政を破壊しているのだとする、彼の政治指導のありように対する攻撃をも読み取ることができるかもしれない。一方でデモカレスは、書簡の出来事に関してデメトリオスとストラトクレスに対して反発を示し、彼はストラトクレスを非難したことが原因となって追放刑に処された（Plut. *Demetr.* 24.5. デモカレスの追放と帰国の年代については L. C. Smith, 'Demochares of Leuconoe and the Dates of His Exile', *Historia* 11, 1962: 114-8 を参照のこと）。その後フィリッピデスも自発的に国外に退去していったと考えられている（e.g. Ferguson, W. S., 1905, 'Athenian Politics in the early Third Century', *Klio* 5: 162-163, 1911: 124; Paschidis 2008: 116-117）。また、スフェットス区出身のカリアスもその可能性が指摘されている。カリアスについては波部雄一郎, 2014, 『プトレマイオス王国と東地中海世界——ヘレニズム王権とディオニュシズム——』関西学院大学出版会: 80-81; 周藤芳幸, 2015, 『ナイル世界のヘレニズム——エジプトとギリシアの遭遇——』名古屋大学出版会: 290-295 を参照のこと。

こうした反発は、上にみたエリート層のみならず、一般市民層にも共有されていた可能性があると考えられる。というのも、両王とストラトクレスら親デメトリオスのグループに対して反発するかのよう、前303年頃、顕彰によって授与される金冠の値段が法によって決定されることとなったのである（史料については、以下の文献を参照のこと Osborne, M. J., 1982, *Naturalization in Athens*. vol. 2. Brussel: 135, 135 n. 585; Paschidis 2008: 95-96 n. 3, 96 n. 1）。金冠の相場は以前には500か1,000ドラクマから選択されていたが、この法改正により予め値段が設定されることになったのである。両王と彼らの幕友に対して大量の顕彰が決議されていたことを考えれば、この措置の持つ意味を両王への抵抗として捉える先行研究の傾向は理解できよう。年代については議論があるが、少なくとも前303年の夏以前には法が改正されたとみてよい。同様に、前303年には市民権付与に際して資格審査が再び必要とされるようになった。これによって、民会決議によって市民権が付与されていたのを、民衆裁判所での審査が必要となったのである（Osborne 1982: 136, 125-126. Paschidis 2008: 95-96）。これもまた、幕友に対する市民権付与の頻発が関連している可能性は否定できない。そして、こうした市民権付与を伴う顕彰決議の大半は、残存している限り、ストラトクレスが提案した

ものであった。

確かに前 304 年以降、アテナイが自由を侵害されたことは明らかだが、こうした変化をアテナイ側の抵抗として解釈するには直接証拠に欠けており、可能性の域を出ていない。

なお Paschidis は、両王やストラトクレスのへの反発として、以上の他に 3 つの事例を挙げているが、根拠に乏しく、紙幅の関係もあるので言及しない (Paschidis 2008: 97-98, no. 4-6)。ただしそれぞれ今後発展の余地がある論点であるとも思われる。

- 54) E.g. Kralli 1996: 142-145.
- 55) Paschidis 2008: 98-103.
- 56) Kralli, I., 2000, 'Athens and the Hellenistic Kings (338-261 BC): The Language of the Decrees', *CQ* 50: 123.
- 57) Herman, G., 1980/81 'The "Friends" of the early Hellenistic Rulers: Servants or Officials?', *Talanta* 12/13: 104-106; Kralli 2000: 120.
- 58) Billows, A., 1995, *Kings and Colonists: Aspects of Macedonian Imperialism*, Leiden/New York: 70-80.
- 59) *PA* 4568.
- 60) Plut. *Demetr.* 34.4.
- 61) Cf. Hansen, M. H, 1989 [1983], 'The Athenian 'Politicians', 403-322 B.C.' in id. ed. *The Athenian Ecclesia II: A Collection of Articles 1983-1989*. Copenhagen: 1-24; Ober, J., 1989, *Mass and Elite in Democratic Athens: Rhetoric, Ideology and the Power of the People*, Princeton: 104-106, 110.
- 62) [Plut.] *Mor.* 798e.
- 63) Plut. *Demetr.* 13.1-2.
- 64) Plut. *Demetr.* 12.1.
- 65) *SEG* 36.165; *IG* II<sup>2</sup> 498 + *SEG* 21.338; *IG* II<sup>2</sup> 562 + Schweigert, E., 1940, 'Greek Inscriptions', *Hesperia* 9: 342; *IG* XII 1, 129. なおこれらは全て評議会先議決議である。
- 66) *IG* II<sup>2</sup> 459 + *SEG* 21.330, 25.77; *IG* II<sup>2</sup> 773 + Dow, S., 1933, 'Notes on Three Decrees of B.C. 306/5', *AjArch.* 37: 415-416 with *SEG* 26.88; *SEG* 16.60; *IG* II<sup>2</sup> 479 (=480) + *SEG* 33.93; Osborne, M. J., 1981, *Naturalization in Athens*, vol. I, Brussel: D44; Schweigert, E., 1937, 'Inscriptions in the Epigraphical Museum', *Hesperia* 6: 323-327, no. 4; Osborne 1981: D62; *Ag.* 16.122; *IG* II<sup>2</sup> 558; *IG* II<sup>2</sup> 555; Osborne 1981: D49; Osborne 1981: D59; Osborne 1981: D66; *Ag.* 16.144.
- 67) デメトリオスのために私的に奉納を行った 11 ~ 12 人のアテナイ市民も知られている (*IG* II<sup>2</sup> 3424 + Wilhelm, A., 1937, 'Ein Gedicht zu Ehren der Könige Antigonos und Demetrios', *ApX.Ep.* 76: 203-207 (=id., 1984, *Abhandlungen und Beiträge zur griechischen Inschriftenkunde*, Teil II, Leipzig: 181-185), cf. Paschidis 2008 : 106-107. 碑文の年代については Paschidis, P., 2013, 'Agora XVI 107 and the Royal Title of Demetrius Poliorcetes', in V. A. Troncoso and E. M. Anson, eds., *After Alexander: the Time of the Diadochi (323-281 BC)*, Oxford: 126 を参照のこと)。
- 68) コロフォン : *IG* II<sup>2</sup> 456; プリエネ : *SEG* 3.86.
- 69) *IG* II<sup>2</sup> 503.
- 70) *IG* II<sup>2</sup> 640.
- 71) Gastaldi, E. C., 2006, 'Atene nella prima età ellenistica: la testimonianza dei decreti onorari', in P. Desideri, S. Roda e A.M. Biraschi, edd., *Costruzione e uso del passato storico nella cultura antica*. Convegno Internazionale di studi Firenze 18-20 settembre 2003, Alessandria: 116-117.
- 72) *PA/APF* 3716; Ferguson 1911: 103, 171-173; Billows 1990: 337-339; Habicht 1997: 72-74; Paschidis 2008: A49, 153-159
- 73) Polyb. 12.13.5; [Plut.] *Mor. XOrat.* 847d. MacKendrick 1969: 36 は、デモカレスがブジュガイの氏族であった可能性を指摘している。
- 74) [Plut.] *Mor. XOrat.* 847d.
- 75) *Ath.* 13.610e-f. ソフォクレスの提案は、ファレロンのデメトリオスが輩出し、親マケドニア的態度を示していたペリパトス学派を狙ったものと考えられている (Habicht 1997: 73-74)。
- 76) *IG* II<sup>2</sup> 463.

- 77) [Plut.] *Mor. XOrat.* 851d-f.
- 78) Demochares *FGrH* 73 F 4 (Polyb. 12.13.8-11)
- 79) 前 319/8 年: *Ag.* 16.102; 前 311/0 年: *IG* II<sup>2</sup> 453 + *SEG* 32.100.
- 80) *PA/APF* 14356; Paschidis 2008: A40, 116-125.
- 81) *IG* II<sup>2</sup> 2323a, l. 41. この時彼はディオニュシア祭の喜劇競技で優勝を果たしている (前 313/2 年)。
- 82) *IG* II<sup>3</sup> 1, 877, ll. 48-50.
- 83) 彼以外にも、例えば表一 31 番に挙げた、前 307 年に哲学者をアテナイから追放する法を提案したソフォクレスは以前の活動を把握することはできない。
- 84) Plut. *Demetr.* 13.1-2; [Plut.] *Mor.* 798e; *PA* 4568; Paschidis 2008: A42, 129-131.
- 85) 前 318 年においても同様の事例が確認できるが、それについては別稿にて論ずる予定である。
- 86) 内政における外交使節の重要性については佐藤昇, 2008, 『民主政アテナイの賄賂言説』山川出版社: 128-177 を参照のこと。
- 87) Perlman, S., 1967, 'Political Leadership in Athens in the Fourth Century B.C.', *PP* 22: 172-173; Hamel, D., 1995, 'Strategoi on Bema: The Separation of Political and Military Authority in Fourth-Century', *AHB* 9: 25-39
- 88) Perlman 1967: 173-176.
- 89) それぞれ、表一 11, 34 番。
- 90) ハブロンについては Merker, I. L., 1986, 'Habron the son of Lykougos of Boutadai', *AncW* 14: 41-50 を参照のこと。
- 91) *IG* II<sup>2</sup> 1492B, ll. 118-123 (前 306/5 年); *SEG* 38.143B, col. 2, ll. 10-11 (前 304/3 年)。
- 92) クセノクレスについては *APF* 11234; Habicht, C., 1994, *Athen in hellenistischer Zeit: gesammelte Aufsätze*. München: 323-327 (= Habicht, C., 1988, 'Die beiden Xenokles von Sphettos', *Hesperia* 57: 323-327); Paschidis 2008: A31, 107-109 を参照のこと。
- 93) *IG* II<sup>3</sup> 4, 519.
- 94) 従来はファレロンのデメトリオスの治世に、富裕者を保護するために設置された役職だと考えられていたが、近年では否定されている (cf. 高畠純夫, 1985, 「ファレロンのデメトリオスの政治」『バルカン・小アジア研究』11: 35)。むしろ、民主政が設置された前 307 年に置かれた役職だとする学説が現在では有力である (cf. O'Sullivan 2009: 168-185, esp. 173-174; Wilson, P. and Csapo, E., 2012, 'From Choregia to Agonothesia: Evidence for the Administration and Finance of the Athenian Theatre in the Late Fourth Century BC', in D. Rosenbloom and J. Davidson, eds., *Greek Drama IV: Texts, Contexts, Performance*, Oxford: 300-321)。
- 95) *IG* II<sup>3</sup> 1, 1160, ll. 4-5.
- 96) Cf. Paschidis 2008: 107.
- 97) 表一 28, 29 番。
- 98) オリュンピオドロスについては Gabbert, J., 1996, 'The Career of Olympiodorus of Athens (c. 340-270 BC)', *AncW* 27: 59-66; Paschidis 2008: A44, 133-139 を参照のこと。
- 99) デモカレスの将軍職就任年代については Sarikakis, T. H., 1953, 'Οι Αθηναίοι στρατηγοί των ελληνιστικών χρόνων', *Αθῆνα* 57: 276 を参照のこと。
- 100) 表一 19, 20, 30, 33, 36 番。
- 101) *IG* II<sup>2</sup> 1487, ll. 80-84; Reinmuth, O. W., 1971, *The Ephebic Inscriptions of the Fourth Century B.C.*, Leiden: 118, no. 18, l. 14, cf. Sarikakis, T., 1951, *The Hoplite General in Athens: a Prosopography*, Cicago: 23.
- 102) Polyb. 12.13.5-6, cf. [Plut.] *Mor. XOrat.* 847d.
- 103) Ober 1989: 120-121; Hamel 1995, *contra* Tritle, L., 1993, 'Continuity and Change in the Athenian Strategia', *AHB* 7: 125-9.
- 104) Cf. Oliver, G. J., 2007, *War, Food, and Politics in Early Hellenistic Athens*. Oxford: 113-137.
- 105) ヘレニズム期における都市エリート層にとっての国土防衛の重要性については, Quass, F., 1993, *Die Honoratiorenschicht in den Städten des griechischen Ostens: Untersuchungen zur politischen und*

*sozialen Entwicklung in hellenistischer und römischer Zeit*, Stuttgart: 84-89; Chanotis, A., 2005, *War in the Hellenistic World: a Social and Cultural History*, Malden, MA: 29-36 を参照のこと。

- 106) 例えば前 288 年ごろに生じたデメトリオスに対する蜂起の際に王との交渉を担ったスフェッ투스区ファイドロスや (cf. *APF* 13963; *IG* II<sup>3</sup> 1, 911), 前 229/8 年以降にアテナイを指導したエウリュクレイデス (Habicht, C. 1982, *Studien zur Geschichte Athens in hellenistischer Zeit*. Göttingen: 179-182) といった人物を挙げることができる。
  - 107) 佐藤 2008: 153-166, 169-171 及び 142 頁表 2 を参照のこと。
  - 108) フィリッポスとの交渉: *Diod.* 17.15.4-5; アンティパトロスとの交渉: *Plut. Phoc.* 30. 4-6; *Diod.* 18.18.1, 18.48. 1-3.
  - 109) *Diod.* 18.64.4; *Plut. Phoc.* 30.2, cf. 26.3.
  - 110) *Plut. Demetr.* 12.5; *IG* II<sup>3</sup> 1, 877. 橋本資久, 2006, 「ヘレニズム時代初頭アテナイの顕彰制度の変容——megistai timai をめぐって——」『史学雑誌』115: 1701-1723 は、外交での活躍が相対的に重要となったことを指摘している。
  - 111) 前 322 年, 前 318 年, 前 317 年, 前 307 年。
  - 112) かつてリュクルゴスに与えられていた顕彰決議が、このストラトクレスによる顕彰を刻む際に同時に刻まれたらしく、アクロポリスからその断片が発見されている (*IG* II<sup>2</sup> 3027, cf. Lambert, S. D., 2015, 'The Inscribed Version of the Decree Honouring Lykourgos of Boutadai' (*IG* II<sup>2</sup> 457 and 3207)', *AIO papers* no. 6)。
  - 113) 断片 a: Κουμανούδης, Σ. Α. 1860, *Επιγραφαί ελληνικαί κατά το πλείστον ανέκδοτοι: εκδιδόμεναι δαπάνη της εν Αθήναις Αρχαιολογικής Εταιρείας*, Φυλλάδιον Α'. Αθήνα, αρθ. 1. 断片 b: id. 1862, *Αρχ.Εφ.* 1862 nr. 241.
  - 114) Curtius, C., 1866, 'Zum Redner Lykurgos: Zwei Bruchstücke vom Decret des Stratokles', *Philologus* 24: 83-114.
  - 115) 1-5 行: Wilhelm, A., 1974, *Akademieschriften zur griechischen Inschriftenkunde (1895-1951)*, Teil. I, Leipzig: 776-782 (=Wilhelm, A., 1942, *Attische Urkunden V*. Wien/Leipzig): 160-66; 8, 11 行: Oikonomides, A. N., 1986, 'The Epigraphical Tradition of the Decree of Stratokles Honoring "Post Mortem" the Orator Lykourgos', *AncW* 14: 51-54 (*SEG* 36.160)。なお断片 a については Piejko によって碑文史料を用いた補いが提案された。平行する碑文史料を用いた彼の議論は魅力的だが、伝ブルタルコスが伝える起草文が既に文字数が欠損部に合っているため、異なる補いを施す必要は特にないように思われる (Piejko, F., 1991 'Antiochus III and Teos reconsidered', *Belleten* 55: 31-32, cf. *SEG* 31.84, compare [Plut.] *Mor. XOrat.* 852a)。
  - 116) [Plut.] *Mor. XOrat.* 851f-852e.
  - 117) 校訂者による。
  - 118) [Plut.] *Mor. XOrat.* 841e.
  - 119) Gastaldi 2006: 116-117 は、こうした記憶の再構成は、カッサンドロスに対抗して彼の支配から脱するべく行われたとする。しかし以下にみるように、決議が未だ前 307 年の「自由」の付与から日が浅い時期に可決されたということに注目する余地があると思われる。
- デメトリオスがペイライエウスのカッサンドロス駐留軍を破り、ファレロンのデメトリオスが逃亡したこと際、アテナイには一種の内訌状態が現出していた。ブルタルコスによれば、デメトリオスがアテナイへの「自由」付与を宣言した際に、中心市内ではファレロンのデメトリオスに対する敵意が高まったという (*Plut. Demetr.* 9.2)。また、ファレロンのデメトリオスが逃亡し、アテナイに「自由」がもたらされた後、ファレロンのデメトリオスとその一派は、「民主政転覆」の罪状で欠席裁判によって死刑に処されている (*Philoch. FGrH* 328 F 66, cf. Grieb 2008: 65)。寡頭政権の支配下にある前 312 年の段階でも、アンティゴノスに都市の解放を要請する勢力の動きが存在したことを、ディオドロスが伝えている (*Diod.* 19.78.4) さらにその後も、アテナイにはかつての支配的勢力に対する不満が残されていたらしくディオゲネスが伝えるように、その後もファレロンのデメトリオスの敵対勢力が彼と彼の友人 (メナンドロス) を徹底的に攻撃したことを伝えている (*D. L.* 5.77, 79)。既に言及した哲学者たちを狙った法の提案も、この文脈に位置づけられるだろう (*Ath.* 13.610e-f; Habicht 1997: 73-74)。ファレロンのデメトリオスやカッサンドロスの駐留軍に対して不満

を抱いていた人々、あるいは、市民権から排除されていた低い社会階層の人々の不満や、以前の政体で利益を享受した富裕層との間に不和があったと想定すべきであろう。そして、リュクルゴスに対する顕彰も、この文脈の中で理解されうと思われる。

- 120) Bayliss 2011: 155-156 を参照のこと。
- 121) この時期の政治家たちは、こうした碑文の効果に自覚的であったらしい。というのも、Tracy, S. V., 2000, 'Athenian Politicians and Inscriptions of the Years 307 to 302', *Hesperia* 69: 227-233によると、この時期、決議提案者の名を視覚的に強調する碑文が増加しているという。つまり、決議提案者たる政治家たちは、碑文において彼らの名を強調することで、市民たちに自身の名を知らしめようと試みていたというのである。Cf. Bayliss 2011: 104.
- 122) 碑文において民主政という文言が登場するのは稀なことであり、「解放」に伴って民主政と言う語が碑文に乱用されたわけではない。これに関しては別稿にて詳しく論ずる。
- 123) Diod. 20.45; Plut. *Demetr.* 11.1, 24.4-5, 26.3-4.
- 124) 酒嶋基平, 2016, 「ヘレニズム初期アテナイ民主政における民衆と政治——前 307 年復活民主政下の情勢から——」修士学位請求論文, 京都大学: 72-155, 特に 72-74.
- 125) なおストラトクレスが提案者として同定されることがある *IG* II<sup>2</sup> 455 + *SEG* 21.327; *IG* II<sup>2</sup> 474 + Dow 1933: 412-413 については、彼の名前は全て補いとなっているため、判断を保留した。また *SEG* 31.80 は異なる校訂が提案されているため (*SEG* 36.161), 判断を保留した。
- 126) *IG* II<sup>2</sup> 560; Osborne 1981: D102, ll. 16-21; *Ag.* 16.110; *IG* II<sup>2</sup> 739 + Pritchett, W. K., 1972, 'Lucubrationes Epigraphicae', *CSCA* 5: 170.
- 127) *IG* II<sup>2</sup> 456 + *SEG* 24.328; *IG* II<sup>2</sup> 457; *IG* II<sup>2</sup> 461 + *SEG* 21.322; *SEG* 3.86; *IG* II<sup>2</sup> 460 + *SEG* 21.331; *IG* II<sup>2</sup> 470 + Wilhelm 1942: 170; *IG* II<sup>2</sup> 471; *IG* II<sup>2</sup> 469.
- 128) Osborne 1981: D45; *SEG* 36.162; *SEG* 36.164; *IG* II<sup>2</sup> 559 + 568 = add., p. 662; *IG* II<sup>2</sup> 492; Osborne 1981: D60; Osborne 1981: D61; Osborne 1981: D62; Broneer, O., 1931, 'Eros and Aphrodite on the North Slope of the Acropolis in Athens', *Hesperia* 1: no. 2; *IG* II<sup>2</sup> 640.
- 129) こうした決議は、プルタルコスストラトクレスに対する評価を反映するものとして認識されてきた。例えば *OCD*<sup>4</sup>, s.v. Stratocles を参照のこと。
- 130) *IG* II<sup>2</sup> 461 + *SEG* 21.322; *IG* II<sup>2</sup> 460 + *SEG* 21.331; Broneer 1931: no. 2; *Ag.* 16.110.
- 131) *IG* II<sup>2</sup> 469.
- 132) [... 欠 ...] オティモスについては Billows 1990: 443, no. 125 を参照のこと。なお, Paschidis 2008: 84-85 は、アンティゴノスの部下としてではなく都市を援助した個人として彼が顕彰されたと主張しているが、その解釈を導くには碑文の情報が乏しいうえに、五行目から八行目にかけて両王が言及されているという事実は、損なわれた十行目以降に王との何らかの関係が刻まれていた可能性を示唆している。
- 133) *IG* II<sup>2</sup> 469; Osborne 1981: D45; *SEG* 36.164.
- 134) なお、両王共に、「自由」と「自治」というスローガンは用いているが、「民主政」のスローガンを用いていたという積極的な証拠はない (cf. Wallace 2011: 177-185; Diod. 19.61)。Contra Kralli 2000: 122.
- 135) Plut. *Demetr.* 11.3.
- 136) パフォーマンスや「劇的」な身振り手振りに関しては Chaniotis, A., 1997, 'Theatricality Beyond the Theater: Staging Public Life in the Hellenistic World', *Pallas* 47: 219-259; Ober 1989: 152-155, 174-177, 221-226, 306-311 の議論を参考にした。
- 137) Plut. *Phoc.* 32.5.

表一：前 307- 前 301 年に政治・軍事・外交における活動者

祖先について情報がある、あるいは前 307 年以前に活動が知られている人物

|    | 名前       | 父名      | 区         | 活動                                               | 家系・以前の活動                                                                                              | 史料                                                                                                                                        |
|----|----------|---------|-----------|--------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1  | アリストデモス  | エクセケストス | コトキダイ区    | 前 304/3 年に評議員                                    | 前 4 世紀から続く富裕な家族 (?). Cf. <i>APF</i> 4719                                                              | <i>Ag.</i> 15.61, l. 122 (304/3)                                                                                                          |
| 2  | エウテュディコス | ケフィソドロス | アナギュルス区   | 前 302/1 年に評議員                                    | 前 5 世紀から続く最富裕家系／前 4 世紀の政治家メイディアスの孫 cf. <i>APF</i> 9719                                                | <i>Ag.</i> 16.123, l. 8 (302/1)                                                                                                           |
| 3  | エウフィレトス  | アリスティデス | ケフィシア区    | 前 302/1 年に評議員／顕彰決議を提案                            | 前 5 世紀から続く最裕福家系／叔父はシキュオン人エウフロンの最初の顕彰決議を提案。Cf. <i>APF</i> 6067                                         | <i>IG</i> II <sup>2</sup> 505 + Kirchner, J. <i>IG</i> II <sup>2</sup> (1916) add. p. 661 + <i>SEG</i> 16.61 (302/1)                      |
| 4  | エピゲネス    | エピゲネス   | キュダテナイオン区 | 前 304/3 年に評議員                                    | 父が前 330 年代に共同三段 權 船 奉 仕 役。Cf. <i>APF</i> 4787=4806 (=10807).                                          | <i>Ag.</i> 15.61, l. 67 (304/3)                                                                                                           |
| 5  | クセノクレス   | クセイニス   | スフェットス区   | 前 307 年にアゴノテテス職／前 306/5 年にアンティゴノスの下に使節として派遣      | 前 330 年代より三段 權 船 長, 財務長官職, 秘儀監督官などを務める。「リュクルゴスの友人」として知られる。Cf. <i>APF</i> 11233-11234.                 | <i>IG</i> II <sup>3</sup> 4, 519 (307/6); <i>IG</i> II <sup>2</sup> 1492B, l. 100 (306/5)                                                 |
| 6  | グラウキッポス  | ヒュペレイデス | コリュットス区   | 政治家／弁論家                                          | 前 4 世紀中頃の政治家ヒュペレイデスの子 cf. <i>APF</i> 13912                                                            | [Plut.] <i>Mor. XOrat.</i> . 848d, 850b (304?); Plut. <i>Phoc.</i> 4.2                                                                    |
| 7  | ストラトクレス  | エウテュデモス | ディオメイア区   | 民会における決議提案                                       | 前 4 世紀から続く裕福な家系／前 324/3 年に原告としてハルパロス事件に参加／前 323/2 年に民会での決議提案                                          | 彼の経歴, 史料に関しては本文で言及する。                                                                                                                     |
| 8  | ディオティモス  | ディオベイテス | エウオニュモン区  | 民会における決議提案                                       | 前 5 世紀から続く最裕福家系 cf. <i>APF</i> 4386                                                                   | <i>IG</i> II <sup>2</sup> 467 + J. Kirchner, <i>IG</i> II <sup>2</sup> (1916) add. p. 661 + <i>SEG</i> 31.81, 34.73 (306/5)               |
| 9  | デモカレス    | ラケス     | レウコノエ区    | 政治・弁論家／前 305 年に 将 軍 ? (305 ? cf. Sarikakis 1953) | 前 5 世紀から続く最裕福家系／デモステネスの甥 cf. <i>APF</i> 3716                                                          | <i>IG</i> II <sup>2</sup> 463 (307/6); <i>IG</i> II <sup>2</sup> 1492B, 126-127 (305/4)                                                   |
| 10 | テロクレス    | テレグノトス  | アロベケ区     | 前 303/2 年に評議員                                    | 寡頭政期から活動 (前 319/8 年に評議員／前 311/10 年に決議提案)                                                              | <i>Ag.</i> 15.62, 309 (303/2)                                                                                                             |
| 11 | ハブロン     | リュクルゴス  | プタダエ区     | 前 307/6 年に財務長官／前 306/5 年に軍事財務官                   | 前 6 世紀以来の名家の出／前 4 世紀の政治家リュクルゴスの子／前 307/6 年に財務長官／前 306/5 年に軍事財務官／前 330 年頃にエフェボイに参加 cf. <i>APF</i> 9251 | <i>IG</i> II <sup>2</sup> 463, l. 36 (307/6); <i>IG</i> II <sup>2</sup> 1492B, ll. 123-124 (306/5); cf. [Plut.] <i>Mor. XOrat.</i> . 850b |

|    |                   |          |          |                                    |                                                                                                                                                                                                                                                    |                                                                                 |
|----|-------------------|----------|----------|------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------|
| 12 | フィリッピデス           | フィロクレス   | ケファレ区    | 喜劇作家                               | 寡頭政期から活動／前4世紀から続く最富裕家系 cf. <i>APF</i> 14546                                                                                                                                                                                                        | <i>IG</i> II <sup>3</sup> 1, 877;<br><i>Suda</i> Φ 345                          |
| 13 | フィロストラトス          | フィロストラトス | ケフィシア区   | 評議員として決議提案                         | サモスから帰国した植民者／サモス島で評議員?                                                                                                                                                                                                                             | <i>IG</i> II <sup>2</sup> 498 + <i>SEG</i> 21.338, 52.102 (303/2)               |
| 14 | メイディアス            | メイディアス   | アナギュルス区  | 民会における決議提案(フォキオン顕彰決議)?／前304/3年に評議員 | 前5世紀から続く最富裕家系／前4世紀の政治家メイディアスの子 cf. <i>APF</i> 9719                                                                                                                                                                                                 | [Plut.] <i>Mor. XOrat.</i> 850b (305/4?); <i>Ag.</i> 15.61, l. 177 (304/3)      |
| 15 | ムネサルコス            | ティモストラトス | プロバリントス区 | 評議員として決議提案／前301/0年に書記              | 前330年代に評議員                                                                                                                                                                                                                                         | Osborne 1981: D46 (303/2, 10)                                                   |
| 16 | リュシクラテス           | リュシストラトス | メリテ区     | 前303/2年に評議員／民会?における決議提案            | 前6世紀から続く最富裕家系 cf. <i>APF</i> 11473                                                                                                                                                                                                                 | <i>SEG</i> 50.143, l. 6 (303/2); <i>IG</i> II <sup>2</sup> 506, l. 1 (c. 302/1) |
| 17 | [...c.9...]<br>HΣ | ディオグネットス | メリテ区     | 前304/3年に評議員                        | 父はオルゲオネスから土地を借りた人物 (LGNP II, Διόγνητος, 31), 父親の兄弟はメリテ区アルケシラスの子オネトル (LGNP II, Ὀνήτωρ, 18) と推測されており, それらが正しければ彼らは前4世紀において裕福な家系の一つである (Papazarkadas, N., 2011, <i>Sacred and Public Land in Ancient Athens</i> , Oxford: 204, cf. <i>APF</i> 11473)。 | <i>Ag.</i> 15.61, l. 139 (304/3)                                                |
| 18 | [...c. 8...]      | コマイオス    | セマキダイ区   | 前304/3年に評議員                        | 父が前330年代に三段櫓船奉仕を務めた富裕層 cf. <i>APF</i> 8693                                                                                                                                                                                                         | <i>Ag.</i> 15.61, l. 330 (304/3)                                                |

## 前307年から活動が知られる人物

|    | 名前       | 父名     | 区      | 活動                            | 家系・以前の活動 | 史料                                                        |
|----|----------|--------|--------|-------------------------------|----------|-----------------------------------------------------------|
| 19 | アスクレピアデス | ?      | ?      | 前303/2年に将軍?                   | ?        | <i>IRhannous</i> 2 + Paschidis 2008: 112, n. 3            |
| 20 | アリステュッロス | ?      | ?      | 前306/5年に将軍                    | ?        | <i>IG</i> II <sup>2</sup> 1487, ll. 80-84                 |
| 21 | イスキュリアス  | ?      | アイクソネ区 | 評議員として決議提案                    | ?        | <i>IG</i> II <sup>2</sup> 1492B, ll. 108, 114-115 (306/5) |
| 22 | エウカレス    | エウアルコス | コンテュレ区 | 前304/3年頃にノモテタイ／ノモテタイとして顕彰を受ける | ?        | <i>IG</i> II <sup>2</sup> 487, ll. 14, 22                 |

|    |           |           |         |                                                           |   |                                                                                                     |
|----|-----------|-----------|---------|-----------------------------------------------------------|---|-----------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 23 | エウプリデス    | エウプロス     | エレウシス区  | 民会における決議提案                                                | ? | <i>Hesperia</i> 5 (1936) 201-5 (305/4, 18th, 11); <i>IG II</i> <sup>2</sup> 483 (304/3, 21th, 7)    |
| 24 | オリュンピオドロス | ?         | ?       | 前 307-304 年頃に将軍／前 305/4 年にアイトリアに使節として派遣／前 302/1 年に将軍      | ? | オリュンピオドロスの経歴については Gabbert (1995) <i>AncW</i> 27: 59-66 を参照のこと。                                      |
| 25 | カライデス     | リュティデス    | クシュベテ区  | 評議員として決議提案                                                | ? | <i>SEG</i> 36.165 (304/3, 9th, 10)                                                                  |
| 26 | カッリアス     | リュシマコス    | ヘルモス区   | 民会における決議提案／前 305/4 年に評議員／前 304/3 年に評議員                    | ? | <i>IG II</i> <sup>2</sup> 493 (303/2, 28th, 12)                                                     |
| 27 | カリストス     | テオドトス     | スフェットス区 | 民会における決議提案／前 303/2 年に評議員務める                               | ? | <i>IG II</i> <sup>2</sup> 489 + <i>SEG</i> 45.95 + <i>Ag.</i> 16, p. 186 (303/2, 20th, 8)           |
| 28 | キオニデス     | ?         | トリア区    | 前 306/5 年にアンティゴノスの下に使節として派遣／前 305/4 年にレムノス・インブロス島に使節として派遣 | ? | <i>IG II</i> <sup>2</sup> 1492B, 101, 132                                                           |
| 29 | クレアイネトス   | ?         | ?       | 前 306/5 年にアンティゴノスの下に使節として派遣                               | ? | <i>IG II</i> <sup>2</sup> 1492B, 100                                                                |
| 30 | ケフィソフォン   | アンティクレス   | ?       | 前 304/3 年に将軍                                              | ? | Petrakos 1999: 1. 32-33, 430.                                                                       |
| 31 | ソフォクレス    | アンフィクレイデス | スニオン区   | 前 307/6 年に法の提案                                            | ? | D.L. 5.38.                                                                                          |
| 32 | ドロモクレイデス  | ?         | スフェットス区 | 民会における決議提案                                                | ? | [Plut.] <i>Mor.</i> 798e; Plut. <i>Demetr.</i> 13; Plut. <i>Demetr.</i> 34                          |
| 33 | ニコクレイデス   | ?         | ?       | 307-304 年頃に将軍                                             | ? | Osborne 1981: D44 + <i>SEG</i> 58.120, 1. 5                                                         |
| 34 | フィリッポス    | ニキアス      | アカルナイ区  | 民会で提案／前 306/5 年に軍事財務官／前 304/3 年に財務長官                      | ? | <i>IG II</i> <sup>2</sup> 1492B, ll. 118-123 (306/5); <i>SEG</i> 38.143B, col. 2, ll. 10-11 (304/3) |
| 35 | フィレアス     | フィロナウテス   | パレネ区    | 民会における決議提案／前 307-301 年の間に評議員として顕彰受ける                      | ? | <i>IG II</i> <sup>2</sup> 554 (c. 306/5 or after)                                                   |

|    |      |     |            |                         |   |                                                                                              |
|----|------|-----|------------|-------------------------|---|----------------------------------------------------------------------------------------------|
| 36 | ヘギアス | ?   | ?          | 306/5 年に將軍              | ? | <i>IG</i> II <sup>2</sup> 505, l. 31, 1487, ll. 92-93                                        |
| 37 | メムノン | メドン | アフイド<br>ナ区 | 302/1 年に評議員<br>として決議提案? | ? | <i>Ag.</i> 16.123 (302/<br>1, 25th, 4); <i>IG</i><br>II <sup>2</sup> 500 (302/1,<br>27th, 8) |

## Stratocles “the Flatterer” and the Politics of Early Hellenistic Athens

Kyohei SAKESHIMA

In order to consider the political situation in Athens between 307 and 301 BCE and the influence on Greek cities of the dominance of the kings, this paper focuses on the political actions of Stratocles, one of the most prominent politicians in Athens, and regarded in ancient literature and modern scholarship as a flatterer of Antigonos I Monophthalmus and Demetrius I Poliorcetes. The points of the author's discussion are as follows:

First, contrary to the view of previous scholarship, Stratocles was not a “flatterer” of the kings, as his political actions concerning Demetrius were carried out in response to the pressure or the request of the king. In addition, these actions can be regarded not only as pursuit of self-advancement but also as the pursuit of profits for Athens. Furthermore, contrary to the view that Stratocles looked to his own interests and changed his behaviour after 304/3 BCE, the author argues that his actions did not change throughout the period 307-301 BCE. In addition, by considering Stratocles' political actions as other than “flattery”, the author confirms his argument.

Second, the author explores Stratocles' political position in Athens through the prosopographic study of persons who were active between 307 and 301 BCE. After examining data collected by the author, he argues that Stratocles lacked some of the political capital held by his contemporary politicians, as the people do not seem to have elected him as a general or envoy or to offices such as held by Demochares, one of Stratocles' contemporary political rivals. Furthermore, Stratocles might also not have been chosen as envoy to the kings.

Third, the author considers the political basis of Stratocles. After enumerating Stratocles' political capital, the author examines the texts of decrees proposed by Stratocles, in order to reconsider his political actions. Through a consideration of the literary texts, the author insists that Stratocles' “theoretical” performance in the assembly was important for his political career.

As a result of his discussions, the author confirms that the profit gained by Stratocles during 307-301 BCE was the leadership of Athens, as long as he upheld the dominance of the kings. This also confirms the importance and the vitality of democracy of Greek poleis in the early Hellenistic period.